

<神々の真相 2>

<神々の真相 1>では 14 のタブレットから成る「エンキ神の御言葉」を基に、シュメール及び「神々」の真相を述べた。その中で、エジプトの真相に関わる事項もあったが、ここでは、エジプト文明の真髄であるピラミッドとスフィンクスのカッパーラについて考察する。更に、日本とエジプトの関係についても考察する。

1 : エジプトに関連する<神々の真相 1>のまとめ

まずは<神々の真相 1>に登場したエジプトに関連する事項をまとめておく。

- ・ピラミッドは、宇宙船の離発着の目印とされ、アヌンナキ＝「神々」が永久に繁栄する象徴であり、ニンギシュジッタが大洪水後に設計して建造した。現在は存在しない冠石は、金と銀の合金エレクトラムで造られていた。そして、ピラミッド内部にはニビルのハイテク機器が満載されていた。しかも、ピラミッドは当初、“双子山”と言われているように、いわゆるクフ（第 1 ピラミッド）とカウラー（第 2 ピラミッド）しか無かったようである。もう 1 つのピラミッドと“死と復活”を象徴する石棺は、マルドゥクがイナンナー族との戦いに負けた後、造られたのであろう。
- ・イナンナー族とマルドゥク一派の最初の戦いで、マルドゥクはピラミッドに生きたまま幽閉された。救出の任務を負わされたのは、設計者のニンギシュジッタである。
- ・マルドゥクの妬みにより、ニンギシュジッタはアメリカ大陸へ渡ることとなり、ケツアルコアトルと呼ばれた。ニンギシュジッタはマルドゥクが追放されていた時期、地球人を娶ったアヌンナキの子孫の助けを借りてエジプトで国を監督し、“崇高な神”として崇拝されていた。そして、かつてマルドゥクが計画したことは撤回され、隠しておいたものを破壊し、“陰陽”の概念を導入した。ならば、この時点でピラミッドの内部に“死と復活”を象徴する石棺が置かれ、ピラミッドが双子山から 3 つになった可能性がある。
- ・エジプトでは、アヌンナキはネテル（ネフィリム）、マルドゥクはラー、エンキはプタハ、ニンギシュジッタはテフティ（トート）として想起された。特に、ニンギシュジッタについての記憶を消すため、マルドゥクはスフィンクスの姿を、自分の息子ナブの姿に変えた。スフィンクスの別名はセシェプ・アंक・アトゥムで、最高神アトゥム・ラーの生きた像、という意味であるが、神話と共に、事実が相当改竄された。特に、ニンギシュジッタは呪文でイシスの姿を隠したり、ホルスに向かって呪文を唱え、仮死状態のホルスが息を吹き返したりと、魔術・妖術の原型とされてしまった。これも、ニンギシュジッタを陥れようとするマルドゥクの策である。

- マルドゥクはヘリオポリスのエンキ神殿に、自分の使っていた宇宙船の先端部をベンベンと名付け、それを毎年新年の 1 日だけ王に拝ませ、偶像崇拜させた。マルドゥクこそ、偶像崇拜の根源である。
- エンキはあらゆる種類の“メ”をマルドゥクに与え、あらゆる種類の知識を授けたが、唯一、“死者を蘇らせること”は教えなかった。ならば、マルドゥクが“死と復活”を象徴する石棺及び 3 つ並ぶピラミッドとその意味について知る由も無いから、石棺ともう 1 つのピラミッドはマルドゥクが造ったものではなく、ニンギシュジツダが造ったと考えるのが妥当である。
- マルドゥクは、“死と復活”の問題に、熟考すべき点が多いことに気がついた。そして、王や民の忠誠を維持するために、“来世で神の国に行き、そこで復活できる”という死生観を植え付け、復活するためには肉体が必要だから、ミイラという保存方法が開発された。つまり、マルドゥクの言う“死と復活”の問題とはこのようなことであり、イエスに関連するような“死と復活”ではない。また、“来世への旅”を記した長い本をでっち上げ、「死者の書」とした。そして、
- マルドゥクは“神の神性”という概念に興味を惹かれ、自分自身が偉大なる「神」になると宣言した。
- マルドゥクはラーとして、あらゆる「神々」の上に自分を君臨させ、他のアヌナキの属性を、勝手に我が物のように語った。これにはエンキも激怒した。マルドゥクは天が覇権を示していることを主張したが、実際にはまだエンリルの時代だった。マルドゥクの主張に対抗するため、指導者たちは人々に空の観測の仕方を教えるようニンギシュジツダに頼み、ニヌルタとイシュクルの助けにより、世界各地にストーンヘンジを造らせた。
- マルドゥクがバビロンに強引に神殿を建造すると、怒ったイナンナは彼の手下を手当たり次第に殺した。マルドゥクはネルガルに説得され、立ち去ることを決意し、国から国へと、空から眺めて移動した。その後、ラーは第 2 の地域でアムン、“見えざる者”と呼ばれた。アムン（アモン）とは、神話上で追放されたラーのエジプト名である。
- マルドゥクは“邪悪な蛇”と呼ばれた。中東からヨーロッパの神話で、牡牛が戦っている蛇は“邪悪な蛇”である。
- エジプト神話はすべてマルドゥクにとって都合が良いように構成され、後に、メソポタミアの神話もマルドゥクにとって都合の良いように改竄された。よって、神話や伝承だけに頼っていても真相に近づくことはできない。つまり、口頭伝承を基本とするカッパーラだけでは、真相に辿り着くことはできない。

2：エジプトの主神

一般的に言われているエジプトの主神について、述べておく。

“多神教だったエジプトを唯一神崇拝に変えたのは、18 王朝アメンホテップ 4 世である。アメン（アムン、アモン）は嵐の神で、太陽神ラーと融合したアメン・ラーのこと。アメンホテップとは、アメンは満足している、という意味である。しかし突如、アメン・ラーを放棄してアトン（アテン）の唯一神崇拝を始めた。都をテーベからテル・エル・アマルナへ遷都し、自らをイクナートン（アトンの生ける魂）と名乗った。アトンも太陽神であり、アトンは具体的な形を持たないヤハウエのような神である。アトンに捧げられた讃歌と旧約の詩篇の内容がほぼ一致するので、詩篇のルーツはアトン讃歌であると言える。

しかし、イクナートン以前、エジプトは元々唯一神信仰でアトゥム＝アトンを崇拝していた。唯一絶対神は“存在させる”という意味でケプリとも呼ばれた。更に、光の属性を加えたものがラーである。日の出の太陽神アトゥム、天空の太陽神ラー、日没の太陽神ケプリである。唯一神、多神いずれにしろ、最高神は太陽神である。”

ヘブライ語の主はアドナイであり、アトン→アドン→アドナイと変遷していることが解る。

3：ピラミッドとスフィンクスのカッパラー

(1)ピラミッドと「生命の樹」

エジプトと言えばピラミッドであるが、その原型はシュメールのジグラットである。小さなものまで含めればいくつもピラミッドはあるが、中でも重要なものがギザの三大ピラミッドである。一般的に、第 1 ピラミッドはクフ王、第 2 ピラミッドはカフラー王、第 3 ピラミッドはメンカウラー王の墓であると言われている。しかし、これは間違いである。クフ王の墓とされたのは、第 1 ピラミッド内の「重力拡散の部屋」の玄室を 1837 年に最初に発見したリチャード・ヴァイスが、玄室内に“カフ”と書かれていたと主張したことに依る。しかし、シュメールでお馴染みのゼカリア・シッチン氏は古代言語学の立場からヒエログリフを解析し、“カフ”というのは誤った文字であることを示唆した。（シッチン氏はこれまで見てきたように、異星人説を展開していることから、学会では無視され続けている。）また、他の王家の墓で見られるヒエログリフが一切見られないことが他の学者から指摘された。そこで、炭素 14 で“カフ”という文字の年代測定を行ったところ、150 年ほど前という鑑定結果が得られた。これにより、リチャード・ヴァイスが名声目当てに“カフ”と書いたことが判明した。

<神々の真相 1>で見たように、ピラミッドはエジプト文明が出現する前から存在した。クフ王は自分も偉大なピラミッドを造りたいと願い、奴隷ではなく 4000 人足らずの自由市民に賃金を払い、大ピラミッドの前に並ぶ小ピラミッドを造ったに過ぎない。大ピラミッドは王たちの墓ではなく、王の墓の多くは王

家の谷にある。それに、王の墓ならば、多くのヒエログリフが描かれているはずであるが、大ピラミッドの内部には一切描かれていないことから、王の墓ではない。では、大ピラミッドとは何なのか。

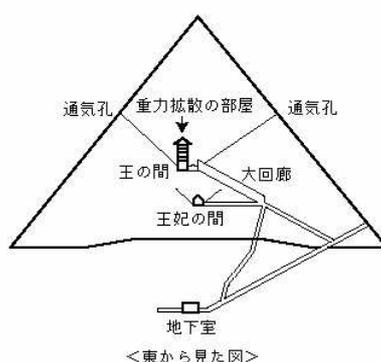
それは、「生命の樹」である。3つ並ぶ高さの異なるピラミッドは山であり、漢字の“山”の原型である。また、モーゼは荒野にある神の山でアロンと会っているが、そのような山は無い。その山こそピラミッドであり、“神の山”である。原型がシュメールのジグラットであるから、「神々」が降臨する場所である。

では、どのピラミッドがどの柱に相当するのか。1つは、玄室の天井の形が示唆している。第1ピラミッドは平坦、第2は三角形、第3は半円である。「生命の樹」の至高世界はケテル、コクマー、ビナーで囲まれた三角形であるから、真ん中の第2ピラミッドが均衡の柱に相当する。

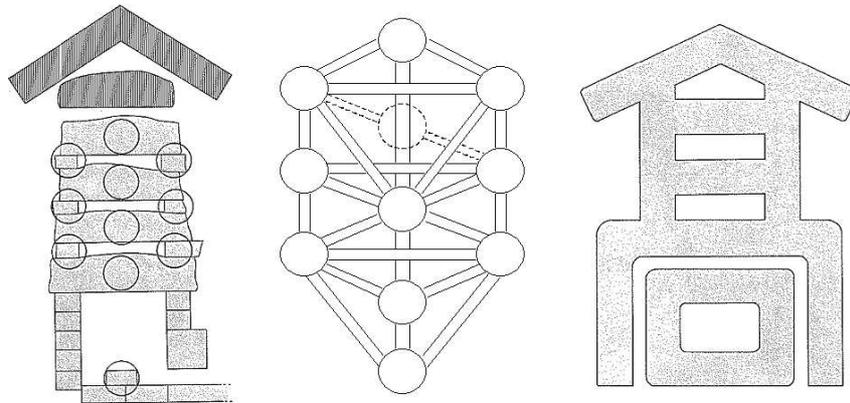
もう1つは並びである。ピラミッドは四角錐であるため、正面が解りにくいですが、スフィンクスが向いている東側が正面である。そこで、東向きに見ると、第1ピラミッドが第2ピラミッドの左側で、第3ピラミッドが右側である。エジプトの絶対神は太陽神だから、太陽＝絶対神側から見ると、第1は第2の向かって右で、第3は左となる。そして、第2ピラミッドは第1ピラミッドより高い台地に立っているため、最も大きく見えるが、実は最も大きいのは第1ピラミッドである。よって、第1ピラミッドが慈悲の柱、第3ピラミッドが峻厳の柱に相当する。

・峻厳：第3ピラミッド、均衡：第2ピラミッド、慈悲：第1ピラミッド。

ピラミッドの並びは「生命の樹」であるが、1つでも「生命の樹」となっている。次の図は第1ピラミッドの内部である。



地下は“星の栄光”で下層世界、王妃の間は“月の栄光”で中高世界、王の間は“太陽の栄光”で至高世界である。また、王の間＝至高世界には、「重力拡散の部屋」がある。この部屋は、拡大すると次のような構造である。



構造的には、一番下に蓋の無い石棺があり、石棺の位置はマルクトに相当し、各柱の支え石及び 4 つの床石がそれ以外の各セフィロトに相当する。更に、三角屋根の天上が浮いていて、至高世界が独立していることを表し、「生命の樹」に対応している。

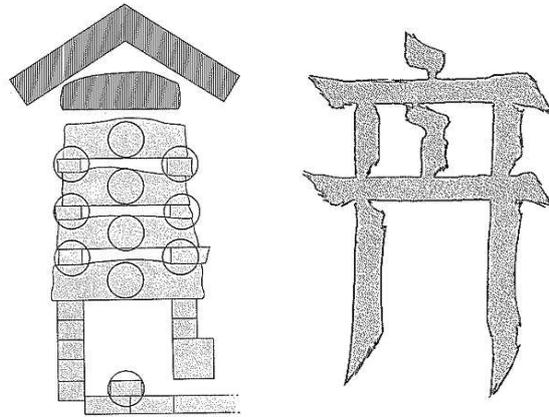
石棺には最初から蓋は無く、何も存在しない。一般的に言われているような、盗賊に遭ってミイラや副葬品が盗まれたりしたのではない。何故なら、ピラミッドは墓ではなく、この石棺で“死と復活の儀式”を行うためのものである。これは、天皇陛下崩御後、大嘗祭で皇太子が御襖（おふすま）という寝床に横になり、また起き上がる儀式と同じである。（王の墓ならば、多くのヒエログリフが描かれているが、一切無いこともそれを証明している。）

また、この構造を文字として表したのが図の右側であり、これは高島屋のマークで、漢字の“高”である。“高”は上の“口”の部分に縦線を繋げた“高”もある。これは、至高世界と中高世界が梯子で繋がっていることを表す。ヤコブがハランの地で、天使たちが天界の梯子を昇り降りしていたことが、それを象徴している。更に、「重力拡散の部屋」の構造は“倉”という字にも変形できる。こちらの方が、むしろ原図に近いように思える。

なお、第 2、第 3 ピラミッドには「重力拡散の部屋」が無い。つまり、“死と復活の儀式”を行うことができ、かつ「生命の樹」の奥義を体現しているのは、慈悲の柱＝イエスに相当する第 1 ピラミッドだけである。

つまり、エジプトのピラミッドは 3 つのピラミッドで「生命の樹」を具現化し、更に第 1 ピラミッドだけでも「生命の樹」を具現化している。更に、その中の「重力拡散の部屋」で「生命の樹」を具現化しているフラクタル三重構造である。その中で最も重要なのは、“死と復活の儀式”を行うことができる「重力拡散の部屋」であり、これが漢字の“高”“倉”として象徴される。そして、“死と復活の儀式”を行うことができるのは、慈悲の柱＝イエスに相当する第 1 ピラミッドだけである。

更に、「重力拡散の部屋」は鳥居、YHWH としても象徴される。



また、シュメールの伝承にはこうある。

“メソポタミアのシッパールの基地が大洪水によって消し去られた後、「神々」が宇宙基地を再建した特殊制限領域で、太陽神ウツが管理していたのがティルムン＝エルサレム（ミサイルの場所）である。制限地域には制限航路があり、その南の境界線はアララト山とシナイ半島のカテリナ・モーゼ連山を結ぶ線で、カテリナ・モーゼ連山の頂上が南のランドマークであった。北の境界線はアララト山からバアルベクを経由し、エジプトへと延びる線である。しかし、エジプトにはそのような目印となる山が無かったので、人工的に設置したのがピラミッドである。北緯 30 度線と南緯 30 度線を境界とし、北の領域を“エンリルの道”、中央の領域を“アヌの道”、南の領域を“エンキの道”と名付けた。北緯 30 度線は古代に於いて“神聖緯度”とされており、エリドゥ、ヘリオポリス、ハラッパーなどの古代聖都が配置されている。大洪水後にシナイ半島に建設された新宇宙空港（エルサレム）と飛行路も、北緯 30 度線上に配置された。そして北のランドマークも、北の境界線と北緯 30 度線の交点に建設され、エクルと呼ばれた。そこはエンキの領地だったが、中立的立場にあるニンフルサグが管理し、“運命の銘板”と“ディルガ（暗く輝く部屋）”を備えた航空誘導施設であった。エンキはアフリカ南部を統治することとなった。

スフィンクスは北緯 30 度線に沿って東向きで、その彼方にはシナイ半島の宇宙空港がある。ピラミッドは、アララト山を着陸航路の目標とする宇宙空港滑走路の誘導標識である。”

メソポタミアの北緯 30 度前後では、春分の日の昼夜の長さが一致するので、シュメールでは昼夜の長さを正確に測定し、1 年の初めにする春分暦が使用されていた。そのため北緯 30 度なのだろう。勿論、他にも数学的・幾何学的理由などがあるかもしれないが、今後の研究が待たれる。

また、大ピラミッドの正確な位置は北緯 29 度 58 分 51 秒である。スコットランド王立天文台長によると、宇宙から地球を眺めた場合、大気圏の屈折を計算

に入れると、緯度 30 度の位置にピラミッドが見えるようにするためには、29 度 58 分 22 秒に建てなければならないらしい。

(<http://www14.plala.or.jp/tm86/episode3.html> 参照。)

このことから、ピラミッドは大気圏外から眺めた場合の航空誘導施設であると言える。

更に、王の間（至高世界）に至る大回廊の傾斜角度 26.2 度で、第 1 ピラミッドの真東から直線を延ばすと、ベツレヘムを通過する。これは、カッパーラ的には、イエスがベツレヘムで誕生することと同時に、至高世界に至るには、イエスを受け入れなければならない＝真のカッパーラを理解しなければならないことを暗示する。このように、“知られざる叡智”がピラミッドには数多く封印されている。

よって、ピラミッドはシュメールの「神々」の航空誘導施設であり、“知恵の奥義”を封印した「生命の樹」を具現化したものである。

(2) ピラミッド建造者とエノク伝説

ピラミッドを建造したのはニンギシュジッタである。しかし、お膝元のハム系フリーメイソンの口頭伝承や、14 世紀エジプトの歴史家アル・マクリージーの「群国誌」ではエノク（別名イドリス）ということになっている。

<神々の真相 1>で示したように、エノクの原型はエンキ・メ（“エンキによってメを理解した”）である。彼は賢く、数をすぐに理解し、天空と空に関するすべての知識をエンキから授かり、月と火星にも行った。そして、ウツに認められ、エンキ・メが初の聖職者となった。また、“年代記”では彼について、天空に旅立った、死ぬまでそこに留まったと記されており、エノクが天空に旅立って留まったという伝承も、これが原型である。

では、何故、ピラミッド建造者がエノクとなってしまったのか。それは、マルドゥクによるニンギシュジッタの真相及び神話の改竄が原因である。

エノクはヘルメスとも言われる。ギリシャでは叡智の神とされ、別名トートである。トートはエジプト神話に於ける知恵の神であり、錬金術の神秘主義ヘルメス学では、ヘルメス＝トートを神官、王、賢人（哲学者）である三重に偉大な者“トート・ヘルメス・トリスメギストス”と言う。ヘルメス学に於けるヘルメスは、長い剣に 2 匹の蛇が巻き付いたカドゥケウスの杖を持つ姿で描かれる。そして、エノクはあらゆる秘教の大元とされており、彼が天使との会話に用いたエノク語は、至高の力と叡智をもたらす呪文とされる。秘教の大元とされたのは、マルドゥクによって、トート＝ニンギシュジッタが呪文でイシスの姿を隠したり、ホルスに向かって呪文を唱え、仮死状態のホルスが息を吹き返したりと、魔術・妖術の原型とされてしまったためである。

*ハム系フリーメイソン

フリーメイソンには、セム系、ハム系、ヤフェト系の 3 系統ある。一般的に

知られているのは、イギリスのロッジで有名なヤフェト系であり、成立年代的に最も新しい。しかし、彼らのロッジこそ“裏の世界権力”が巣くう暗黒のメイソンと化してしまった。

ハム系は古代エジプトの神官から引き継がれており、現在はアラブの資産家や大企業の経営者であったりする。本拠地はカッパーラの奥義が満載されているエジプトであり、エジプト政府も一目置いている。彼らは日本の八咫鳥のように秘密を死守しており、当然、ピラミッドも彼らの管理下にあるため、都合の悪い発掘調査は行えない。

しかし、正統のフリーメイソンは、ユダヤー日本の流れを汲むセム系であり、その長が天皇陛下である。（実質の任務には、八咫鳥が当たっている。）日本の国旗である「日の丸」は四角の中に丸であり、これは定規とコンパスで描かれる。フリーメイソンの象徴には、ピラミッド・アイなどもあるが、本来は定規とコンパスである。つまり、日本は「日の丸」によって、正統セム系フリーメイソンであることを堂々と示しているのである。これも、カッパーラである。

*ヘルメス思想

ヘルメス思想では、人間と神は本質的に同一であり、それを“認識（グノーシス）”しさえすれば、人間を神のレベルにまで高めることができると説く。神と一体化すること、これがグノーシスを有する人々のための目標である。つまり、後のグノーシス主義の根源は、ヘルメス思想である。

*エノクと錬金術

西欧神秘主義に於いて、ヘルメスは特別な存在である。特に錬金術は“ヘルメスの術”とも呼ばれている。錬金術とヘルメス文書は表裏一体である。すなわち、ヘルメス文書が“文字に記された叡智”であるならば、ヘルメスの術＝錬金術は“文字に記されない叡智”であり、自らの手と肉体と精神を総動員して実践することによってのみ、初めて理解しうる知恵である。

一般的な錬金術の目的は、文字通り、金ではないものを金に変換することである。しかし、本来の目的は金に変換することではなく、“賢者の石”を手に入れることであった。“賢者の石”とは、卑金属を金に変える究極の物質であり、権力や富に貪欲な人間、自惚れの強い人間、優柔不断な人間、心悪しき人間には、錬金術の秘密が明かされることは決してない。

エノクが天使との会話に用いたエノク語は、至高の力と叡智をもたらす呪文とされたが、多くの人にとって理解しがたいものであるため、曲解されたり誤解されて伝承された。その典型がエジプト黒魔術（後の西洋黒魔術の根源）であり、エノク書である。特に、エチオピア語エノク書は、デーモンについてのハンドブックとして、重要な魔術書の1つに数えられている。エノク語で諸霊を操る魔術をエノク魔術と言う。

(http://inri.client.jp/hexagon/floorA7F/_floorA7F_alchemy.html 参照。)

*（エチオピア語）エノク書

「創世記」に登場する族長エノクに帰せられる偽書の1つで、現在ではエチ

オピア語訳のみがその全体を伝えているためにこう呼ばれる。エノク第一書とも言う。エノクが幻の中で神を見て“200人の天使”が天から降り、天上、地上、地下の世界を巡って世界の秘密を知らされる内容を記す。エノクが見た秘密の中には、自然界の法則だけでなく、大洪水や最後の審判などの予言も含まれている。しかし、最も重要なのは、人間の娘と交配した“200人の天使＝墮天使”の名称などについての記述で、“200人の天使”はセムジャザを筆頭に、アラキバ、ラメエル、コカビエルなどが含まれている。こうした墮天使は、後に“エノクのデーモン”と呼ばれるようになった。

(<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/1237/e.html> 参照。)

*エノク語

イギリスの科学者で魔術師のジョン・ディーが霊媒師エドワード・ケリーを通じて“天使”との交信を行っている際にその存在が明らかにされた言語で、エノク書に本来使用されていた言語とされる。ディーはケリーを通じてエノク語を入手し、天使との対話をエノク語で綴った。イギリスの魔術師で、近代魔術結社の源流と言われる“黄金の夜明け”（1888年創設）の共同創設者の1人、S.L. マックレガー（メイザーズ）はこの言語を体系化し、20世紀最大の黒魔術師アレスター・クロウリーは“黄金の夜明け”の公用語に採用した。天使の言葉であることから、諸霊を操る際に用いると力を発揮すると信じられ、エノク語で諸霊を操る魔術をエノク魔術と呼ぶ。しかし、ある研究によれば、英語に酷似した文法を持つ疑似言語である。

(<http://www016.upp.so-net.ne.jp/o-world/e.html#10> 参照。)

また、ケリーはペテン師として耳を切り落とされたほどの悪党であった。そして、エノク語によって天使を信じたディーは突拍子もないケリーの話をしてしまう。ケリーはディーが名声のある博士だったことから、“天使のお告げ”と称して金銭を巻き上げたり、彼の妻をモノにしてしまった。更に、ディー博士の名声を利用し、各地の貴族から大金を騙し取ったりした。その後、ディー博士は英国に逃れ、村の占い師としてひっそりと余生を過ごした。ケリーはドイツで逮捕され、牢獄の窓から飛び降り自殺した。そして、“黄金の夜明け”は世界を裏から牛耳る三百人委員会のオカルト組織である。

(<http://dolmeke.blog11.fc2.com/blog-entry-311.html> 参照。)

<神々の真相 1>で見たように、“200人の天使”はマルドゥクに倣って地球人女性と結婚しようとしたイギギのことである。彼らは掟に背いて地球人女性と結婚し、後に反乱の原因となったので、墮天使とされてしまったのである。

このように、エノク書というのはマルドゥクによるニンギシュジッタの真相隠しが原因となった、グノーシス主義的なサタン崇拝の根源の書である。

なお、トート・ヘルメス・トリスメギストスは、卑金属を金に変換する究極の物質“賢者の石”を残したと言われている。しかし、“賢者の石”は石ではなく、隠された沈黙である、とヘルメス文書は言っている。錬金術の奥義はカバーラだから、“賢者の石”とは「生命の樹」であり、トート神の象徴たる“カ

ドゥケウスの杖”でもある。

また、トート・ヘルメス・トリスメギストスは、自らが持つ叡智をエメラルド製の巨大な石板エメラルド・タブレットに刻んだ、とある。彼は後世の賢者のために、それを胸に抱いて、ミイラとして大ピラミッドに埋葬されたそうである。そして、後に大ピラミッドに入った人間がそれを発見し、10世紀頃にはアラビア語からラテン語に翻訳され、中世ヨーロッパのオカルトの根底となったという。

しかし、大ピラミッドは墓ではない。つまり、トート神が胸に抱いていたエメラルド・タブレットとは、「重力拡散の部屋」のことで、「生命の樹」であり、大ピラミッドそのものである。つまり、トート=ニンギシュジッタがピラミッドを建造し、「重力拡散の部屋」と石棺を設置したことを暗示している。

カッパーラの奥義は、文書でも石でもタブレットでもなく、“象徴”である。つまり、エメラルド・タブレットを発見して翻訳したなどということは、カッパーラの奥義を知らない者による勝手な解釈にすぎないデタラメである。そして、“誤り”を流布して中世ヨーロッパのオカルトの根底となったわけだから、「死の樹」を降下していることになる。

また、エノクの別名イドリスは、アラブの伝承に登場する太古の賢人である。驚くべきことに、アラブ人にとって、大ピラミッドがノアの大洪水以前の建造物であることは、ほぼ常識であった。9世紀後半、アブ・バルキは、こう述べている。

“大洪水の直前、多くの賢人は天変地異を予言した。彼らは地上の生物や文明の叡智が失われることを憂慮し、エジプトの大地に石造りの塔を建設した。”

アブ・バルキとほぼ同時代のアラブ人マウスディーは、著書「黄金の牧場と宝石の山」で、大ピラミッドについて詳しく述べている。

“大洪水以前のエジプト王サウリドは、巨大なピラミッドを建設した。彼は、大洪水が起こる300年も前、大地がねじ曲がる夢を見たからだ。…ピラミッドには金銀財宝はもとより、数学や天文学をはじめとする科学の知識が詰められた。”

エジプト王サウリドとは、イドリスと同一人物であり、サウリド=イドリス=エノク=ヘルメスである。しかし、ピラミッドは大洪水後に建造された宇宙船の離発着の目印であり、アヌンナキ=「神々」が永久に繁栄する象徴であるから、この逸話も誤りであることが解る。

つまり、ピラミッドなど、エジプトに関する伝承はことごとく間違いであると言える。それは、マルドゥクが都合の良いように神話を改竄したりしたためである。また、ハムは呪われたカナン人の祖であるため、ハム系フリーメイソンには真相は授けられていないのである。これを喚起することが聖書に書かれ

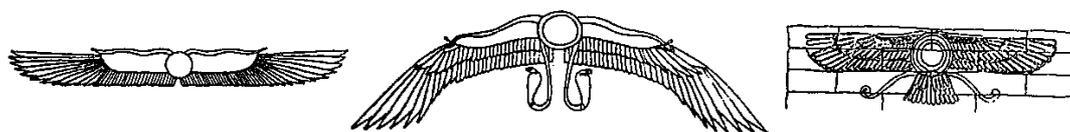
ている。“ファラオの杖”である。アロンとファラオがそれぞれ杖を投げると杖は蛇になり、アロンの蛇がファラオの蛇を飲み込んだ。ファラオの杖は、エジプトの魔術師＝偶像（マルドゥク、邪悪な蛇）崇拝によって蛇に変化した毒蛇、“邪悪な蛇”であるから、“良い蛇神”エンキ、ニンギシュジツダには敵わない、ということである。

(3) スフィンクス

ピラミッドと言えばスフィンクス、スフィンクスと言えばピラミッド、とピラミッドとスフィンクスは切っても切れない関係である。スフィンクスには人頭獅子、隼頭獅子、羊頭獅子などがあるが、最も一般的なのは、ギザの三大ピラミッドの東側にある大スフィンクスの人頭獅子である。スフィンクスは、古典ギリシャ語のスピックス（絞め殺す者）の英語読みであり、エジプト人が刻んだ銘文にはホル・エム・アケトとある。これは、地平線のホルス神＝ラーの化身＝天空船、という意味である。また、元々の名前はシェプスアネクであった。“シェプス”は姿という意味であり、“アネク”は復活や再生の神という意味で、イエスの予型となっている。

スフィンクスは元々ニンギシュジツダの顔であったが、マルドゥクが息子のナブの顔に変えてしまったのである。大スフィンクスは体に比して頭が小さすぎるといっても、これが原因である。つまり、元々の名前こそニンギシュジツダに由来するものであり、“復活”や“再生”の概念も、ニンギシュジツダに因るものである。そして、＜日本の真相＞の“平安京”でも見たように、スフィンクスは人の顔、獅子の胴、牛の尾、鷲の翼で、メルカバーであり、重要なカッパラーで、知恵の神ニンギシュジツダに相応しい。

ホルスは隼の頭を持つ神であるが、本来は太陽神である。それは、“ホル”という言葉がエジプトにおいて最も重要な太陽を表すからである。ホルスの翼は次の図で表される。



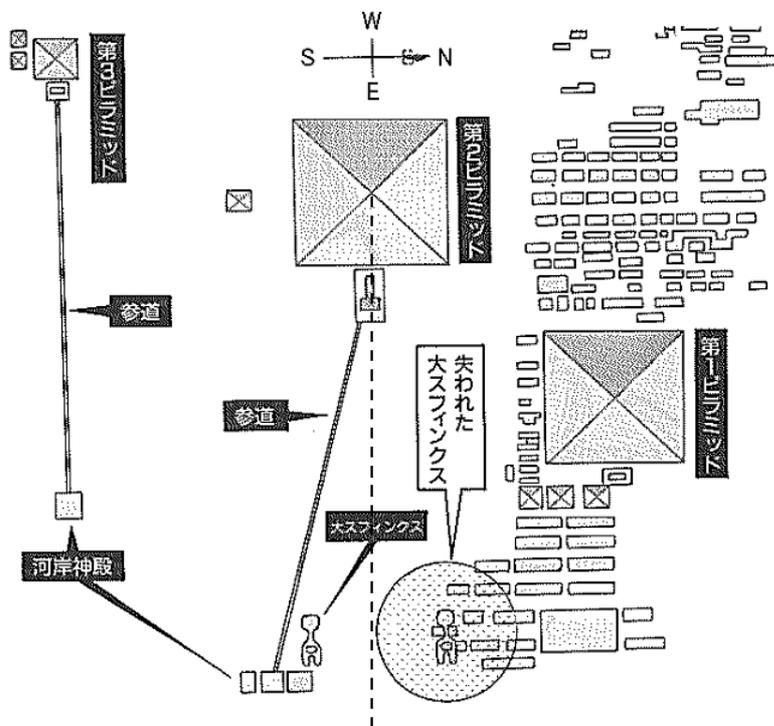
＜神々の真相 1＞で示したように、ニビルとアヌの象徴と同じである。マルドゥクは太陽の都ヘリオポリスのエンキ神殿にベンベンを置いて崇拝させたが、そこは聖書で言うところのオン＝アヌの街であり、それに因む。

では、スフィンクスの役割は何なのか。3つ立ち並ぶ「生命の樹」としては、日本では神社に於ける3つの正殿がある。正殿に辿り着くためには、鳥居をくぐり、場合によっては狛犬の間を通る。狛犬は犬ではなく、元々は“高麗犬”と書き、向かって右が獅子、左が角の生えた狛犬＝ユニコーン（一角獣）であ

る。獅子＝ライオンは大陸伝来であり、中国、インド、メソポタミアにも狛犬は見られるが、いずれも獅子は生息しない。獅子が生息するのは、唯一、アフリカである。つまり、獅子の原型、そして一対の狛犬の原型がスフィンクスである！

実は、スフィンクスは元々一対で存在し、獅子の顔で羽があったと言う。現在、一基は失われているが、神社の狛犬から考えて、向かって右が口を開けた阿、左が口を閉じた吽である。これが、よく言われている口頭伝承“スフィンクスが永遠の叡智を含んだ謎の言葉を語った”ということである。つまり、阿＝アルファ＝最初、吽＝オメガ＝最後であるから、“最初であり最後、アルファでありオメガである”と言ったイエスの予型である！これは、前述の“アネク＝復活や再生の神”とも一致する。ならば、破壊されたのはどちらのスフィンクスなのか。

現在、スフィンクスが存在する場所は、ピラミッドの配置から見てアンバランスである。しかし、次の図のようにもう 1 つのスフィンクスが対の狛犬のように存在すれば、バランスが取れる。つまり、第 2 ピラミッドの中心線を東に延長し、現在のスフィンクスの線対称となる位置である。そして、この構造は、ほぼ神社での正殿に対する狛犬の配置に相当する。



スフィンクスの前足の間には、トトメス4世が造らせた花崗岩の石碑がある。

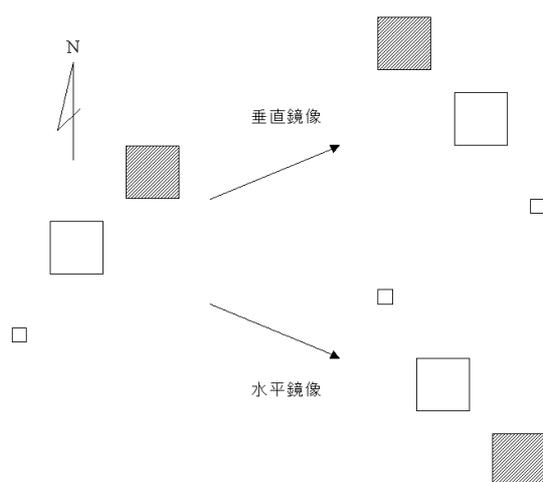
そこには、2頭のスフィンクスが背中合わせに並んで彫られている。エジプト芸術の技法として、向かい合わせではなく普通に左右に並んでいる状態をそのように描く特徴があることから、スフィンクスは一对で存在したと言える。また、この下半分は破壊されているが、そこには失われたスフィンクスの哀歌が書かれていたらしい。

“失われたスフィンクス”が存在していた場所は現在、貴族の墓マスタバが存在するが、それは後世になって建造されたものである。

このように、何らかの理由で破壊されたスフィンクスは、東から向かって右側のものであり、現在残っているのは左側のものである。破壊された残骸は、河岸神殿や大スフィンクス神殿の材料となった。河岸神殿や大スフィンクス神殿の材料はスフィンクスを造った残りの石灰岩で造ったのではないことが判明している。それは、両方の神殿の石灰岩の石質も現在のスフィンクスのもとは異なり、失われたと推定されるスフィンクス付近の岩盤の石灰岩と酷似しているからである。

ハム系フリーメイソンの伝承では、スフィンクスは翼を付けたエノクということになっており、通説ではカフラー王の顔を象ったと言われている。しかし、実情は、ピラミッドを建造したニンギシュジッタを讃えるために造られた建造物であり、元々は彼の顔だったが、マルドゥクによってナブの顔に変えられてしまったのである。右側のスフィンクスは、おそらくイナンナー族とマルドゥク一派の最初の戦いで破壊されたのであろう。

ここで、ピラミッドの配置を図示したので、その「合わせ鏡」の配置を図示する。前述の図とは向きが異なり、通常の間図通り、上が北である。第1ピラミッドは塗りつぶしてある。



普通、鏡像というと垂直鏡像をイメージするが、ピラミッドと「合わせ鏡」の配置である伊勢神宮の配置は水平鏡像である。このように、鏡像には垂直と

水平の2種類あることに注意しなければならない。

閑話休題。スフィンクスの別の側面を示すものとして、エジプト18王朝の讃歌にはこうある。

“通信は天より下り　ヘリオポリスにて聞き取られ　メンフィスにて繰り返される　美しき顔（スフィンクス）によって…　神々は通信に従って行動する”

これをゼカリア・シッチン風に解釈すれば、スフィンクスは通信センターだったことになる。しかし、スフィンクス内部にそのような施設や空洞が見つかったという報告は無いので、通信センターだったとしても、その周辺部や地下だったと推定される。あるいは、破壊される前の口の部分がそれに相当したのかもしれない。また、スフィンクスと同じような一対を形成するものとして、契約の箱アークの上のケルビムがある。ケルビムも通信装置だった可能性がある。その原型のスフィンクスも通信装置であったこと推定することは可能である。そして、おそらくケルビムも、正面向かって右が口を開いた阿像、左が口を閉じた吽像のはずである。

また、スフィンクスには風化ではなく、水流によって削られた浸食跡が発見されている。1992年、学者のジョン・ウエスト氏とボストン大学のロバート・ショック博士が、スフィンクスの胴体には雨による浸食跡が見られた、と発表した。ショック博士は、スフィンクスを囲む南側の壁に注目し、上からの雨による浸食の跡を確認した。彼の主張はこうである。

“これが風による風化であれば、柔らかい地層の部分から削られていくが、ここは上の地層から削られており、所々に明らかに水が流れた痕跡が見られることから、この壁が掘り出された後に雨による浸食があったことは疑いようがない。そして、この地域は1万年前頃までは緑のサバンナであり、気候は現在よりもかなり涼しく、曇りがちで雨が多かったと考えられている。その後、地球の氷河期が終わって乾燥が始まり、7000年前頃から数千年間は再び雨の多い期間であった。そして、古代エジプト王朝が始まったと考えられているBC3000年頃には再び乾燥が始まり、現在に至っている。よって、スフィンクスが作られたのは、通説のカフラー王の時代（BC2500年頃）ではなく、もっと以前、約1万年前であろう。”

これからも、“ピラミッドは約1万年前に建造された”という“事実”は裏付けられる。しかし、中には、ピラミッドはノアの大洪水以前から存在した、という説がある。それらは、次の神話と伝承が基になっている。

・オイディプス神話：

謎掛けを解かれたスフィンクスが谷川（海）に身を投げた。

・口頭伝承

大洪水前から存在する巨大な石像＝スフィンクスが永遠の叡智を含んだ謎の言葉を語った。

・トトメス4世の石碑

スフィンクスの前足の間には、トトメス4世が造らせた花崗岩の石碑がある。これには、彼が夢で見たことが刻まれている。それは、彼がスフィンクスの影に横たわって寝ている時に、神ハルマキスの化身であるスフィンクスが自ら口を開いて話した言葉である。

“困りきった私の体を見よ。私の体は粉々になろうとしている。私が乗っている砂漠の砂が、私を浸食しようとしている。”

当時のスフィンクスは、ほとんど砂で覆われていた。覆い尽くす砂を取り除いてくれば、その報いとしてファラオになることをトトメスは約束されたので、そのお告げに従い、現在見られるような状態にまで砂を除去した。

・古代の伝承を語るピラミッド・テキスト

かつて世界が水で覆われた時があった。創造神アトゥム神でさえ、立ち上がる陸地が無かった。やがて地上から水が引くと、最初に現れた陸地に巨大な砂山があった。そこの高い砂の頂上にベンベン石という方尖石（四角錐）が祀られていた。ベンベン石はアトゥム神の精子が海に落ちてできた神聖なる石である。アトゥム神はその高い砂山をフェニクス神殿、辺り一帯を聖なる柱という意味でヘリオポリスと名付けた。ここは、神の奥義を授けられた者しか訪れることができなかった。

神話や口頭伝承は、大元はマルドゥクが創り上げたものだから、完全な誤りである。また、砂漠の砂は即座にピラミッドやスフィンクスを覆い尽くすので、これが大洪水によって運ばれた土砂である、という根拠にはならない。

ヘリオポリスと名付けてベンベン＝マルドゥクの乗っていた宇宙船の先端部を崇拜させたのは、マルドゥク自身であるから、アトゥム神はマルドゥクである。つまり、ピラミッド・テキストもマルドゥクの創作、でっち上げに過ぎない。

また何故か、アラブ人はスフィンクスのことをアブル・ホール＝恐怖の父として恐れていた。更にバビロニアではホル・エム・アケト＝ラーの化身＝マルドゥクとなるが、マルドゥクは野望によりバビロニアの主神となった。それ故、メソポタミア地方に住んでいたアラブ人にとっては、“恐怖の神、父”である。

なお、スフィンクスが獅子である理由やピラミッドの並びを、星の位置に求めた人たちがいる。ピラミッドの配置がオリオン座の三つ星に対応しているなどという説を主張しているのが、ロバート・ボーヴァルであり、それを支持して著作にしたのが「神々の指紋」で有名なグラハム・ハンコックである。2人は天文学者ではないので、計算の真偽や正確性は保証できかねるが、その説を紹介する。

・ロバート・ボーヴァルとグラハム・ハンコックの説

エジプトでは特に太陽が神聖視され、日の出の直前に昇る星座（ヘリアカル・ライジング）は、太陽が休まる場所とされる。その星座は“太陽を運ぶ者”であり、天空の主要な柱と言われる。現在は、春分の日太陽は魚座を背景に昇るので、魚座の時代である。この重要な役目を担う星座は、歳差運動のため、2160年毎に次の星座に移動する。

スフィンクスは獅子であるから、スフィンクスが体現している獅子座の時代はいつだったのか。それは約12500年前であった。コンピューターシミュレーションによると、その時代の春分の日、日の出前の地平線上に獅子座を目撃することができる。真東を向くスフィンクスは、獅子座を背景に太陽が昇るのをじっと見据えているのである。この獅子座の獅子こそが、スフィンクスの対となる獅子である。そして、その春分の日太陽が真東から昇る瞬間に合わせて、オリオン座の三つ星が真南の経線上を通過する。この時、天の川と子午線上のオリオン座の三つ星のパターンは、地平線を軸にしてそのまま写し取ったように、地上のナイル川の流れと3つのピラミッドに正確に一致する。

この時代のオリオン座は、歳差運動によって生じる位置のずれが最も低い位置になる。そして、これから12960年かけて最高点まで昇り、更に12960年かけて戻ってくるのである。つまり、12500年前は、オシリスが“最初の時（ゼブ・テピ）”にナイル川流域に文明をもたらしたという伝承に最もふさわしいパターンを示しているのである。

スフィンクスと三大ピラミッドは、天界で同時に発生したこの珍しい現象を、建造物の形で地上にとどめておく役目も帯びている。

ストーンヘンジを建造し、天空の秘密に詳しいニンギシュジッダのこと、このような天界の現象まで考慮してピラミッドを設計したことは、十分考えられる。ピラミッドには、科学的に解明されるべき謎が、まだ多く残っているようである。

(4)ピラミッド、スフィンクス以外のカッパーラ

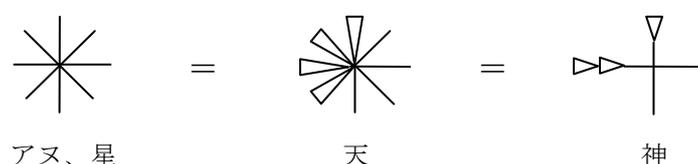
エジプトに隠されたカッパーラは、ピラミッドとスフィンクス以外にもある。カルナックにあるアモン神殿には、パピルス柱とロータス柱が建っている。蓮は上エジプト、パピルスは下エジプトを表す。蓮は花で女性原理、下エジプトのピラミッドはそそり立つ山で男性原理だから、女性原理と男性原理の統合＝陰陽を表す。これを更に象徴化すると、蓮華座に座す釈迦となる。釈迦は男性であり且つ柱にも喩えられるから、陰陽である。と同時に、釈迦も「生命の樹」の奥義を悟ったので、ピラミッドに相当するから、上エジプトと下エジプトの統合の象徴でもある。つまり、仏教に於ける蓮華座は、エジプトに由来している。

特に、蓮の花は“再生”を表し、“復活、再生”の象徴であり、ロゼッタ紋様として知られている。これはエジプトのみならず、中東でも多く見られる。

エジプトとシュメールの関係を考えると、シュメールがすべての根源であり、

マルドゥクが最終的に支配者となり、すべてを手中にした。そのため、元はシュメールのものが、エジプトでも見られるのである。ただし、一時期、マルドゥクが追放されていた間はニンギシュジツダがエジプトを治めていたので、「知恵の神」であるニンギシュジツダが“復活、再生”を象徴する様々な事象を残したと考えられる。

“復活、再生”と言えばイエスであるが、原型はイナンナがエレシュキガルの下で杭に吊されて死んで“復活”し、マルドゥクの奸計により死んだドゥムジの“復活”を夢想していたことである。イナンナの象徴は金星＝ヴィーナスであるが、金星は八角形の図形として象徴される。八角形はまた、アヌとニビル、ヤハウエ、イエス（ベツレヘムの星）の象徴でもある。



これを見ると解るように、アヌ及びアヌの星ニビルの象徴としての八角形が変形され、“天”を象徴する記号と“神”を象徴する十字型になっている。つまり、これらの象徴図形は大神アヌとニビルの象徴であると同時に、シュメールの「神々」をも象徴している。

特に八角形はアヌのお気に入りだったイナンナの象徴ともされ、彼女に因む金星も同じ象徴となる。また、「生命の樹」に於ける最も重要なセフィラであるティファレットは“美”を表すが、これも“美の女神ヴィーナス＝イナンナ”に由来することを象徴しており、集まるパスの数が8本であることにより、この八角形を象徴している。

実は、この八角形が十六紋菊に繋がる。八角形と金星、ロゼッタ紋様について、詳しく調べている人がいる。この中で、十六紋菊に関連する部分を以下に紹介する。十六紋菊は中東やエジプトでも見られる紋様であり、皇室独自のものではない。

<http://www23.tok2.com/home/youda/semataui/semataui.htm>

<上記著者の記述抜粋まとめ>

次の写真は八花卉の紋様であるが、次のサイトに紹介され、解説されている。

<http://wings.buffalo.edu/english/faculty/christian/syllabi/375/hhjw1/hhjw1.htm>

“蠟とロゼッタ。BC3300 年頃、ガウラ期、凍石製。押印。北メソポタミアのイナンナのシンボルである八角星もしくはロゼッタが、この押印の矩形面では 2 匹のサソリのハサミの間に表現されている。”



両サイドにいるのは真上から見たサソリであり、イナンナのシンボルであるロゼッタ紋様＝八花卉を保護している。イナンナの楔形文字のシンボルは、八角星もしくは八花卉のロゼッタである。

イナンナと見なされた金星は、八角星に起源を持つことが、以下のサイトの報告により裏付けられている。

<http://www.symbols.com/old/encyclopedia/25/2519.html>

“数字 8 は金星に関係付けられ、金星は明けの明星、あるいは宵の明星としての神として象徴される。”

また、星についても同様の解説が成されている。

<http://www.symbols.com/old/encyclopedia/25/2520.html>

“イシュタル＝イナンナの星、すなわち金星は、他の地域ではアシュタルと呼ばれ、戦い、性愛、豊穡の女神である。八角形の星は、イエス誕生以前から、よくこの女神の象徴として使われてきた。”

そうすると、先程の写真は花と星の両方を象徴している。また、次の写真もイナンナに関係するが、十六紋菊が象徴として使われている。(新潮古代美術館 1、オリエントの曙光、1980.9.15 より。)



ナラム・シンの戦勝記念碑

アッカド王朝
BC2291～2255年

スーサ出土

ルーブル美術館蔵

解説によると、“天空に輝く2つの星はナラム・シンに決定的な勝利を授ける神々の恩恵を明快に象徴しており”とある。そうすると、この星はイナンナの金星であり、八角星である。その八角星は先端が尖った三角形で表現されている。その間に、四角で表された後光により、倍数の十六角星のように表現されている。よって、十六花弁あるいは十六角星は、イナンナを象徴するロゼッタである。

メソポタミアではロゼッタの名が示すようにバラ科のような植物の花であったが、日本で花と言えば“桜”を示すように、エジプトで花と言えば“蓮”であった。だから、エジプトでは蓮がその象徴となった。実際に、古代種の蓮は16枚の花弁を持つ種類もある。



メリトアメン王女像の胸には十六花弁のロゼッタが刻まれているし、有名なツタンカーメンの遺品やアメンヘテプ3世の遺品でも、十六花弁のロゼッタが多数確認できる。ラムセス3世などは、八花弁のロゼッタである。

メソポタミアでは、アッシュル・ナシルパル2世の浮彫が解り易い。右の図は左腕の拡大画像であり、はっきりと十六花弁ロゼッタが確認できる。



確かに、十六紋菊の意味として、このような解釈が可能である。イナンナはナラム・シンに全土を奪い取るよう命じ、マルドゥクの領地マガンとメルーハに侵攻するように指示した。よって、“ナラム・シンに決定的な勝利を授ける神々”とは、イナンナのことである。そうすると、ナラム・シンの戦勝記念碑に描かれた十六角星はイナンナを象徴する星と言える。そして、イナンナは“復活、再生”の原型だから、十六紋菊も“復活、再生”の象徴となる。

しかし、これだけではない。イエスは太陽神ウツの象徴が満載である。(これについては<神々の真相 5>で詳細に述べる。) ウツとイナンナは双子なので、象徴的には同じでも良い。すると、共に八角星となり、両者を合わせて十六角星と見なすこともできる。

また、新約のイエスが八角星で“8”として象徴されるならば、旧約のヤハウェは“ヤ”で、これも“8”として象徴され、“8”と“8”の「合わせ鏡」で“16”とも見なせる。

このように、八花卉（八角星）あるいは十六花卉（十六角星）はイエスの象徴でもある。では、基となる数字“8”にはどのような意味があるのか。

“8”を図象化すると、2匹の蛇が絡まり合っているかのようなようである。そうすると、思い出すのが“カドゥケウスの杖”である。



絡み合う部分で“8”の字を形成している。カドゥケウスの杖は遺伝子操作で人類を創成し、ピラミッドも造り上げたニンギシュジッタの象徴であり、「生命の樹」そのものであり、二重螺旋の遺伝子を象徴したものであった。そして、ニンギシュジッタの父で、共に人類を創成した地球の主エンキも蛇神である。故に、2匹の蛇はエンキとニンギシュジッタでもある。

数字の“8”を横向きにすると“∞”となり、数学の無限記号、すなわち“永遠”を表す。そして、「生命の樹」は絶え間なく上昇するのであり、これも“永遠”を象徴する。また、“∞”を3次元的な立体で表現すると“メビウスの輪”となる。これは裏も表も無く、ある点から表面をなぞっていくと、最終的にその開始点に戻ってしまう。つまり、最初＝アルファであり最後＝オメガであるから、無限＝“永遠”を象徴すると同時に、イエスを象徴する！確かに、イエスは“永遠の命”の象徴である。

前述したように、イエスの原型の1つはイナンナである。“復活、再生”の原型は、イナンナがエレシュキガルの下で杭に吊されて死んで“復活”し、マルドゥクの奸計により死んだドゥムジの“復活”を夢想していたことである。イナンナは亡きドゥムジとの“永遠”の愛を求め、英雄バンダとの聖婚で死なない力、“不死の力”を手にしたと錯覚した。“永遠”という概念は、このようにイナンナが原型となっている。つまり、イナンナには“復活、再生”と同時に“永遠”という概念が合わさっているから、“復活、再生”＝“永遠”であり、

イエスはまさにその象徴である。その永遠性は「生命の樹」やカドゥケウスの杖で象徴されるが、その絡みつく蛇の象徴が“∞”であり、数字としては“8”となる。だから、永遠性の証として、“8”がイナンナを象徴する数となったのである。そして、そのシンボルを守るように、“8”に関連する蛇が囲っていたりする。

また、イナンナは戦いの女神であり、あらゆる宗教に於ける暗黒の側面でもある。(これについては、<神々の真相4>で詳細に述べる。)戦いや暗黒を蛇に喩えるなら、毒蛇である。メソポタミアやエジプトの砂漠には、毒蛇以外に毒サソリもいる。だから、蛇がシンボルを囲う代わりに、前述の写真のような、サソリがシンボルを囲っていたりするのである。サソリのハサミの部分は蛇のようにも見えるから、原型が蛇であることを象徴しているのだろう。

しかし、ニビルやアヌが八角形で象徴されている以上、本来の“8”はイナンナではなく“ニビルとアヌの永遠の栄光”を象徴していると考えられる。アヌはアッカド名であり、シュメール名はアンである。アン=あん=阿吽だから、最初であり最後である=アルファでありオメガである、となり、“無限、永遠=復活、再生”を象徴する。“アヌ”という名前によって、既に“無限、永遠=復活、再生”という概念が象徴されているのである。アヌはニビルとシュメールの大神ですべての根源だから、イエスの象徴ともなり得るのである。

そして、イナンナには“復活、再生”と同時に“永遠”という概念が合わさっており、象徴的にはアヌと同様であると言える。彼女はアヌに気に入られたために、ウヌグ・キをアヌから譲り受けたが、それと同じように、八角形の象徴も譲り受けたのであろう。

なお、日本に於いて、イエス=天照大神は蛇神で、唯一絶対神である。1匹の蛇で“最初であり最後、アルファでありオメガである”ことを表すならば、蛇が自身の尾を咬んでいる様子として象徴される。これは円である。“8”の中にもカドゥケウスの杖の中にも複数の円が見られる。つまり、円は終わり無き“永遠”を象徴するもう1つのシンボルである。神社の拝殿に安置されている鏡は丸いが、“永遠”と“復活、再生”を象徴するのである。そして、同じ丸い「日の丸」については<日本の真相>で述べた通りであるが、「日の丸」の「○」には、更にこのような意味も含まれているのである。

このように、十六紋菊の原型は蓮の花で“再生”を象徴しており、日本の奥義は天照大神=イエスだから、まさに“復活、再生”を象徴する皇室の御紋として十六紋菊は相応しい。(皇室の十六紋菊は、正式には「十六弁八重表菊紋」と言う。)日本では蓮の花はあまりお目に掛かれないから、身近で花卉が十六花弁紋の形に似ている菊に変えた、と単純に考えてしまうところであるが、そうではない。そこで、もう1つの重要なカッパーラ、漢字を考える。

“艸”は「合わせ鏡」の絶対三神を象徴することは何度も出てきているので良く解るが、問題はその下のつくりである。

・菊：キク、コク（音）。むす（ぶ）、すく（う）、たなごころ（訓）。

このつくりだけで、音読みでは「キク」となる。訓読みでは基本が「勺」で、「手で包む」という意味から、手の平を表す「掌（たなごころ）」となり、英語では“handful”である。そこから派生し、掌で握手して人と人、神と人を結ぶに通じる「むす（ぶ）」、また、手に一杯（水などを）すくうという意味の「すく（う）」となる。この「すく（う）」という読みは「救う」にも繋がり、救世主＝イエスを象徴する！そうすると、「むす（ぶ）」は高御産巢日神（タカミムスビノカミ）＝イエスの「ムスビ」でもある。

更に、「勺」の中には何故か、「米」がある。「米」は大切な食糧だから、手に「すく」えば命の糧となり、ヤハウエが与えた白いウェハースのようなマナの象徴となる。また、上下左右のいずれから見ても、十字架が天使ケルビム（点）の間にあり、反対方向と「合わせ鏡」になっている。更に、「米」は分解すると「八十八」となり“88”、そして「菊」の画数は8画だから、合わせて“888”となる。ギリシャ語で“キリスト”と書くと数秘的な数値は“888”となるから、「菊」という字でイエスの象徴となる！（籠神社の海部宮司が平成8年8月8日に“御生れの時ぞ近づく”と歌に詠み、天照大神が御降臨される時が近いことを象徴している。）

つまり、「菊」という字の草冠で「生命の樹」に於ける絶対三神と「合わせ鏡」の奥義、そして下のつくりで、ヤハウエ＝イエスを象徴しているのである！だからこそ、日本では“再生”を意味する蓮の花の象徴に、更に漢字のカッパラーを合わせて「菊の御紋」としたのである。

以上、皇室の「十六弁八重表菊紋」は、菊の御紋にして菊の花に非ず。

4：日本とエジプトの関係

八角形で象徴されるニビルと金星が十六花弁ロゼッタの原型であり、それが皇室の十六弁八重表菊紋の基になっていることが解ったので、エジプトと日本の関係を考察する。

(1)伊勢神宮外宮の御正宮

伊勢神宮の外宮地下殿には、モーゼの旗竿とマナの壺、そしてメルカバーを表す4本の柱が立てて祀られている。旗竿は杖の一種だから、1メートル弱の長さで推定される。しかし、御正宮を拝してもかなり平坦な土地で面積も広く、とてもそのような地下を掘っているとは考えにくい。

ある時、「伊勢神宮ひとり歩き」（ポプラ社）という本を読んでいると、“敷地内の第一別宮である多賀宮（たかのみや）には鳥居が無く、位置的には御正宮と繋がっているのではないか、と言われている”という神宮司庁・広報係長・石垣氏の発言があった。これを読み、確信した。まさしく多賀宮こそ、外宮の本当の御正宮であり、御神体はその地下に存在する、と。では、何故、多賀宮

が本当の御正宮と確信できるのか。それは、エジプトのピラミッドが教えてくれる！

ここで重要なのは、3：(1)で示した“高”“倉”である。多賀宮の別名は“高宮”と言い、土宮、風宮と合わせて三角形を形成し、亀石で隔てられ、独立した構造となっている。これは、「生命の樹」の至高世界を具現化したものである。（外宮全体の見取り図は、以下のホームページ参照。）

<http://www.isejingu.or.jp/pdf/illust-geku.pdf>

そして、多賀宮へは急な石段を登って行かなければならないような高い場所があり、御正宮のある平地よりも地下は掘りやすい。高い場所にあるから“高宮”と言われているが、そんな単純なことではない。

エジプトのピラミッドは3つのピラミッドで「生命の樹」を具現化し、更に第1ピラミッドだけでも「生命の樹」を具現化している。更に、その中の「重力拡散の部屋」で「生命の樹」を具現化しているフラクタル三重構造である。その中で最も重要なのは、“死と復活の儀式”を行うことができる「重力拡散の部屋」であり、これが漢字の“高”として象徴されるから、“高宮”が重要なのである。重要だからこそ、そこに御神体が存在するはずである。

また、高宮の両側には、高宮を至高三角形の頂点と見た場合、向かって右が土宮、左が風宮である。土宮も特徴的で、御正宮よりも古いとされ、多賀宮と共に、ほぼ南東～東向きである。そして、その背後には“高倉山”が存在する！つまり、土宮は“高倉山”＝漢字で象徴される「生命の樹」を背景に、日の出を拝する構造となっている。日の出を拝する構造は、東向きのピラミッドと同じである！また、土宮で行われる最も重要な祭祀は、式年遷宮行事の1つ“御船代祭”であり、御船＝契約の箱アークである。アークはヤハウエの象徴であるから、高宮、土宮、風宮の配置は、それぞれ均衡の柱、慈悲の柱、峻巖の柱となる。また、契約の箱を造らせた原型はエンキであり、エンキは人類を創成した。最初的人类はアダム＝アダパであり、“赤い土”という意味が含まれているから、エンキに相当する慈悲の柱が土宮であることがこれを裏付ける。

風宮は農業に関わりが深く、風雨の順調（天候）を司る。これにぴったりの神が、エンリルである。エンリルは風、雷の「神」であり、人類に農業を授けた農業の「神」であった。そうすると、「生命の樹」の対応は次のようになり、シュメールの「神々」との対応もぴったり一致する！

・峻巖：風宮＝エンリル、均衡：高宮＝アヌ、慈悲：土宮＝エンキ。

ならば、最も重要な慈悲の柱である土宮に御神体が存在しなければならないことになる。しかし、現在の伊勢神宮は、慈悲の柱に相当する伊雑宮が封印され、最重要の御神体＝心御柱＝聖十字架は均衡の柱に相当する内宮に存在している。

よって、外宮の御神体＝モーゼの旗竿とマナの壺も、土宮ではなく、均衡の柱に相当する高宮＝多賀宮に存在することは間違いない。

さて、内宮でも実は敷地内の第 1 別宮である荒祭宮（あらまつりのみや）には鳥居が無いので、本当の御正殿はここになるのか、という疑問がある。

内宮敷地内での配置は、現在の位置関係で向かって右が御正殿、中が荒祭宮、少し離れた左が風日祈宮（かざひのみのみや、外宮の風宮と同じ）であり、最も重要な右に御正殿は位置する。（次回式年遷宮後には、御正殿と荒祭宮がほぼ重なる配置となる。）

- ・峻巖：風日祈宮、均衡：荒祭宮、慈悲：御正殿。（内宮）
- ・峻巖：風宮、均衡：多賀宮、慈悲：土宮。（外宮）

外宮との相関を見ると、いずれも鳥居が無いのは荒御魂（あらみたま）を祀る第 1 別宮で均衡の柱であるという点、峻巖の柱が風宮＝風日祈宮であるという点が共通している。天照大神の御魂には 2 つの形態があり、御魂の穏やかな姿を和御魂（にぎみたま）、時に臨んで格別に顕著な御神威を現される御魂の働きを荒御魂として讃え、荒御魂は和御魂に匹敵する扱いである。

確かに、荒御魂の性質を考慮し、内宮も同様に右が外されているならば、本当の御正殿は荒祭宮ということになる。しかし、御贄調舎（みにえちょうしゃ、お供えする鮎を調理する儀式が行われる場所）との位置関係や御正殿に於ける格別のお祭り、そして契約の箱アークと合わせると高さ 5 メートルを超える聖十字架を、余裕を持って安置できる地下殿の規模から考えると、やはり、内宮の御正殿は現在の御正殿であると考えざるを得ない。

ならば、どうして内宮は右が外されていないのか。最も重要な御神体は聖十字架（と一体となった契約の箱アーク）である。それは、古事記でイザナギとイザナミが天御柱＝心御柱＝聖十字架の周りを回って国造りしたことで象徴されている。聖十字架が最も重要であるから、それが安置されている御正殿も向かって右側でなければならない。仮に、内宮の本当の御正殿が荒祭宮だとすると、更に重要な御神体が伊雑宮に存在しなければならないことになる。伊雑宮には天照大神の名が書かれた罪状板があるが、それは将来、伊雑宮が復活するための印であり、最も重要な聖十字架の一部であるものの、聖十字架本体よりも重要度（格）は上ではない。伊雑宮に聖十字架が安置されているならば、契約の箱を内宮の荒祭宮に安置して、右側の御正殿を外すこととなる。

つまり、御神体の重要度（格）は内宮が最高であるため、最も重要な御神体＝聖十字架は、内宮の中で最も重要な、向かって右側の御正殿に存在しなければならない。内宮で右を外しているのは“心御柱の正中外し”であり、それは将来復活すべき伊雑宮を暗示していることである。

他に“高倉”と言えば、神武天皇東征時の那賀須泥毘古（ナガスネヒコ）との戦いが思い出される。苦戦する神武たちを救ったのが、熊野の高倉下命（タ

カクラジノミコト) が持ってきた一振りの太刀＝布都御魂 (ふつのみたま) である。これが祀られているのが石上神宮 (いそのかみじんぐう) である。高倉とは 2 つの「生命の樹」＝旧約と新約及び「生命の樹」と「知恵の樹」の「合わせ鏡」を示し、高倉下は“高倉”の下の部分、すなわち「重力拡散の部屋」の下の部分に相当する石棺を示す。石上とは「重力拡散の部屋」の石棺より上の部分である。

つまり、“高倉下”と“石上”を合わせて「生命の樹」全体を象徴しており、ピラミッド及びピラミッドの奥義である「重力拡散の部屋」と“死と復活の儀式を行う石棺”を象徴しているのである。

これは、ユダヤ教徒である物部氏と、原始キリスト教徒である秦氏の融合も象徴している。物部氏は完全なユダヤ教であり、彼らにとって最も聖なる山は、モーゼとアロンが主と対話した荒野にある神の山＝ピラミッドであった。しかし、物部氏はイエスのカッパラーを知らなかったので、「重力拡散の部屋」と“石棺の奥義”は知らず、“高倉”の「合わせ鏡」の奥義も知らなかった。そこに秦氏が合流し、ピラミッドと「合わせ鏡」の奥義を授けた。これは、祀られているのが布都御魂であることから言える。元々、石上神宮は物部氏の拠点であったが、物部氏に婿入りした初代天皇＝応神天皇 (秦氏により原始キリスト教に改宗した大王)＝フル＝布都を祀っているからである。そして、応神天皇の元の名前、真沸流 (マフル) はシュメールとヒッタイトを繋ぐフルリ人 (ミタンニ王国) に由来する。かつて、シュメールとヒッタイトを繋ぐフルリという人々が存在した。旧約ではホライト (自由な人々) と呼ばれる人たちである。フルリ王国はメソポタミアやエジプトではミタンニ王国と呼ばれていた。フルリ＝Hurri＝Harri＝Ary であり、これがアーリア人の根源である。製鉄がフルリ人とシュメール人の専売特許であった。その製鉄技術が如何なく発揮されたのが武器であり、その最たる象徴が剣＝太刀である。そして、おそらくこれに由来するのが、応神天皇の元の名前、真沸流 (マフル) である。

また、熱田神宮の摂社に高座結御子神社 (たかくらむすびみこじんじゃ) がある。ここは名古屋市熱田区高蔵町に鎮座し、尾張氏の祖先である高倉下命が祀られているから、尾張氏＝海部氏の祖先が高倉下命ということである。日本神話は秦氏の創作であり、高倉下命 (物部氏) の立場 (格) は神武天皇 (改宗秦氏系) を救ったものの、それよりも上、ということにはなっていない。つまり、高倉下命の持っていた太刀“布都御魂”が神武天皇を救ったということは、次のような意味を表す。

九州物部王朝に婿入りした失われた十支族 (ユダヤ教) ガド族の大王・真沸流は、婿入りの証として王権の印であるマナの壺を海部氏に託した。海部氏と同族である尾張氏は、もう 1 つの王権の印であるアロンの杖を所有していた。婿入りして完全なヤハウエ信仰となった真沸流大王は、契約の箱アークを持っていた秦氏を半島から呼び寄せた。本格的なヤハウエ信仰とあらば、アークが必要だからである。しかし、真沸流の前に光り輝くヤハウエ＝イエスが降臨することにより、エルサレム教団の秦氏が信仰していたイエスがヤハウエと同一神であることを理解した。そして、秦氏から洗礼を受けて原始キリスト教に改

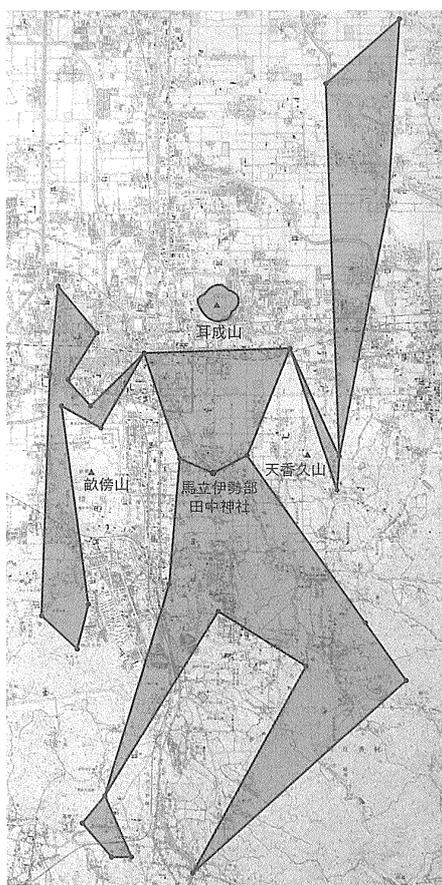
宗し、イエスから王権を授かった時点で、真沸流は秦氏の携えている契約の箱アークと聖十字架を手中に収めた。

物部氏の最大勢力は、近畿・東海を治めていた尾張氏＝海部氏であり、裏切られたと思った尾張氏＝海部氏は真沸流と戦った。戦いの最中、またもや光り輝くヤハウエ＝イエス（金鵒）が彼らの前に降臨し、それを見て尾張氏＝海部氏は改宗して原始キリスト教徒となった。そして、真沸流は初代天皇“応神天皇”となった。

つまり、応神天皇は元々マナの壺を所有しており、更に秦氏からアークと聖十字架も授けられた。そして、最後に尾張氏＝海部氏から王権の印の1つ“布都御魂”＝アロンの杖が授けられ、すべての王権の印が揃った、ということである。そうすると、布都御魂＝アロンの杖＝草薙の剣である。アロンの杖とファラオの杖は共に蛇に変化し、アロンの杖がファラオの杖を飲み込んだ、という逸話からも、アロンの杖はエジプトに関係が深く、エジプトに関係が深い“高”“倉＝蔵”との相関も合っている。

このように、“高”“倉”はエジプトとの関わりが深い。他にも、エジプトとの強い関連を伺わせるのが、春日神社である。

(2) 春日神社（大社）



山上智氏は、著書「飛鳥の地上絵 呪いの巨人像」(学研ムーブックス)で、飛鳥地方の春日神社を結んでいくことにより、“耳成(みみなし)山を頭部としたオリオンに似た巨人像”が描かれていることを突き止めた。

オリオンはギリシャ神話由来のものである。オリオンは海の神ポセイドンの子だった。大変に力のある猟師だったが乱暴者で困ったので、大地母神ガイアがサソリを使い、毒針で刺し殺した。その後、オリオンとサソリは天に上げられ星座となった。両方が一緒にならないように、オリオン座は冬、サソリ座は夏の星座となっている。オリオン座は、右手に棍棒を振り上げ、左手に獅子の毛皮を持つ狩人の姿である。

しかし、この図では、左手に棍棒もしくは剣のようなもの、右手に盾あるいは毛皮を持っており、左右逆である。それに、三ツ星の位置も天空の星座とずれている。山上氏は、巨人像がオリオンであること、この図が星座とは左右逆であることの原因が不明であるとしている。理由は不明であるものの、この巨人像について、次のような見解を述べている。

“この地方＝藤原京に多くの春日神社を造ったのは物部氏の石上朝臣麻呂（イソノカミアソノマロ、元々は物部連麻呂、モノノベノムラジマロ）である。しかし、台頭してきた藤原不比等は朝廷内に深く食い込んで、藤原氏の皇族化を進めていった。そして、不比等は強引とも言えるような平城京への遷都を行い、ますますその権力を高めていった。しかし、天皇に対して忠実な朝臣麻呂は、表立って平城京を攻撃するわけにはいかない。そこで藤原京に残り、元々は物部氏の神社である春日神社を次々に建立し、結ぶべき春日神社を正殿の向きで示し、このような巨人像を造りあげた。巨人の持つ剣の切っ先は、平城京にある聖武天皇一族の墓所を向いている。更に詳細に調べると、不比等の墓に向いている。つまり、この巨人像は「呪いの巨人」である。相手を直接呪うのではなく、墓など関連する場所を呪う陰宅呪術である。事実、平城京に遷都してからというもの、聖武天皇の皇太子が夭逝したり、藤原四兄弟が次々に病死しているが、これこそ「呪い」の効果である。そこで、恐れをなした聖武天皇は、東大寺の大仏を建立した。多くの仏像などは西方浄土の考えから西を向いているが、大仏は仏教の象徴であるにも関わらず、南を向いている。これこそが「呪い返し」であり、大仏の手の結ぶ印が呪いを受けて跳ね返している。”

この説の真偽は後ほどとして、ここで巨人像を造りあげている春日神社（大社）とは何なのか見てみる。通説では、次のようになっている。

“奈良の春日大社は平城京の守護の為に創建され、第一殿は茨城県の鹿島神宮から武甕槌命（タケミカヅチノミコト）、第二殿は千葉県の香取神宮から経津主命（フツヌシノミコト）、第三、四殿は大阪府枚岡（ひらおか）神社から天児屋根命（アメノコヤネノミコト）と比売神（ヒメノカミ）、それぞれ春日野に迎えられた神々が祀られている。中でも武甕槌命は一足早く東の御蓋山（みかさやま＝三笠山）の頂上に降臨し、やがて奈良時代の神護景雲2年（768年）、藤原氏の血を引く女帝、称徳天皇の勅命により、左大臣・藤原永手らが現在地に四所の神殿を創設したのが始まりである。以来、藤原氏の氏神となる。本殿は藤原氏の祖である天児屋根命とスサノオの二神のみが祀られている。”

しかし、古くは“春日大神社”“春日神社”と言われており、三笠山が御神体であった。現在でも、その祭神は境内の撰社、榎本神社に於いて巨勢祝（コセノホフリ）として祀られている。そして、この地は古くから物部氏である和珥（ワニ）氏の本拠地で、三笠山は彼らの信仰の対象であった。

和珥氏の本拠地は奈良盆地の和爾（わに、現在の天理）であり、その後、春日野に移住して春日氏となった。（春日を“かすが”と読むのは、当て字である。）春日氏一族は、布都努斯（ふつぬし）神社の神主であった。布都努斯とは前述の香取神宮から勧請された経津主命のことであり、布都努斯神社は後の石上神宮のことである！石上神宮と言えば、祀られているのは神武東征の時に高倉下が持ってきた太刀＝布都御魂＝布都御魂大神であり、しかも、鹿島神宮から勧請された武甕槌命が中洲を平定した時に持っていた神剣と言われている。

そして、経津主命や武甕槌命は物部氏の神々であるから、象徴で表すと、物

部氏が所有していた王権の印であるアロンの杖＝剣となる。これは、(1)で見たように、布都御魂＝アロンの杖＝草薙の剣と矛盾しない。

このように、石上神宮は物部氏にとって極めて重要な拠点であるが、台頭してきた藤原氏が、石上神宮に纏わる神々をそっくりそのまま藤原氏の氏神である春日大社に置き換えてしまったことから、山上氏は前述のように推論している。

しかし、石上朝臣麻呂は不比等よりも先に死んでいるし、呪うのであれば、不比等が死んでからでなければ、その墓の位置も解らない。また、藤原氏が権力をふるう平城京を呪うことは、天皇を呪うことにもなる。このように、氏の推論にはかなり無理があるし、肝心の巨人像がオリオンに類似している意味がまったく不明である。では、どのように考えたら良いのか。鍵は“石上神宮”である。

石上神宮は、(1)でも見たように、“高倉下”と“石上”を合わせて「生命の樹」全体を象徴しており、ピラミッド及びピラミッドの奥義である「重力拡散の部屋」と“死と復活の儀式を行う石棺”を象徴し、ユダヤ教徒である物部氏と、原始キリスト教徒である秦氏の融合も象徴している。

また、不比等こそ現在の伊勢神宮を建立し、カッパーラを駆使して日本を封印した張本人である。ならば、物部氏の中で最も天皇に寵愛され、重要な石上神宮との関係も深い石上朝臣麻呂も、不比等の計画を知っていたのだろう。いや、むしろ計画を進めることに協力したために、自らは藤原京に残ったのではないか。そして、不比等のカッパーラに従って、春日神社を次々に建立し、巨人像を描いたのではないか。

巨人像はオリオン座の姿に似ているが、左右逆になっている。オリオン座の三ツ星の並びは、エジプトのギザの三大ピラミッドを地上に映したものであること、天の川がナイル川に相当することを、「神々の指紋」で有名なグラハム・ハンコック氏が指摘した。そして日本では、伊勢神宮の外宮、内宮、伊雑宮の並びが、ピラミッドの配置の「合わせ鏡」になっていることは<日本の真相>でも述べた。ならば、オリオンの姿が「合わせ鏡」で左右逆になっていても良いのである。むしろ日本に於いては、伊勢神宮に倣って、エジプトとは鏡像の関係になればならないのである！これで、左右逆の謎は解けた。

では、何故、オリオンなのか。それは、ここまで見てきたように、鍵となる石上神宮が、オリオン座に関係するエジプトのピラミッドとその奥義を象徴している神社だからである！順番的には、秦氏の創り上げた神武東征神話に登場する高倉下、布都御魂と合わせて、布都努斯神社という名称を石上神宮という名称に変更し、物部氏の布都努斯神社には無かったイエスのカッパーラを盛り込み、ピラミッドの奥義を完全に象徴する存在としたのである。そして、ピラミッドを象徴する星座のオリオンの姿で、飛鳥の大地に暗示したのである！だから、手に持っているのは剣ではなく、棍棒である。言うまでも無く、このよ

うな仕掛けを施した張本人は、不平等である。（「あすか」の地名については、ここでは山上氏に従って「飛鳥」としておく。）

そうすると、オリオンを構成する春日神社の別の側面が見えてくる。春日大社は、鹿島神宮、香取神宮を合わせ、藤原氏の氏神としたものである。平安時代に“神宮”の称号と呼ばれていたのは、延喜式によると伊勢神宮、鹿島神宮、香取神宮の3社だけであり、格式の高さが伺える。また武甕槌命が、香取神宮に祀られている経津主命と共に“武芸の神”とされていることから、武術の道場には“鹿島大明神”“香取大明神”と書かれた2軸の掛軸が対になって掲げられたりしている。

鹿島神宮と香取神宮の祭神を合わせて春日大社としたから、中心は春日である。春日＝かすがは当て字であるから、他の意味がある。“春”は“三人（の）日”と分解できる。日は太陽を表すから、“春日”＝“3人の太陽神”である。「生命の樹」は三柱の神を表すが、必ずしもそのすべてが太陽神とは限らない。3人の太陽神が祀られていたのは、エジプトのピラミッドである！

- ・第3＝峻巖：ケプリ、第2＝均衡：ラー、第1＝慈悲：アトゥム。
- ・第3＝峻巖：ホルス、第2＝均衡：オシリス、第1＝慈悲：イシス。

日の出のアトゥム、天空のラー、日没のケプリであり、エジプトは元々唯一神信仰でアトゥム＝アトンを崇拝していたから、人類に関わる唯一神は慈悲の柱となる。また、神話上のオシリス、イシス、ホルスの関係から、このような対応になる。ホルスは鷹であり、鳥であるから、聖霊の鳩に相当する。

実際には、エジプトはマルドゥクが主神だが、本来の創造神はエンキである。エンキはマルドゥクを助けてエジプトに文明を授けたから、慈悲の柱となる。均衡の柱は主神マルドゥクのようにも思えるが、この柱に対応する神はシュメールではアヌ、日本では天之御中主神であり、いずれも最高神ではあるが、実質的に直接人類に関わることはない。エジプトでもマルドゥクがアヌに敬意を表して聖なる都アンヌ（オン、ヘリオポリス）を築き、そこでベンベンを崇拝させたので、アヌが均衡の柱となる。そして、マルドゥク自身は峻巖の柱となる。なお、マルドゥクが追放されている時期、ニンギシュジッタが最高神として崇拝されていたが、後にマルドゥクによって彼の記憶は消されたので、「生命の樹」には対応しない。

- ・峻巖：マルドゥク、均衡：アヌ、慈悲：エンキ。

春日大社での「生命の樹」の対応は、春日大社が中心で、鹿島が最も早く勧請された＝最も重要だから、次のようになる。

- ・峻巖：香取神宮、均衡：春日大社、慈悲：鹿島神宮。

エジプトでは、太陽神ラー＝マルドゥクと見なされている。マルドゥクはエ

ジプトを治めていたが、後にメソポタミア地方も力で支配してバビロニアの主神にもなったこと、あるいは“ニヌルタとして鍬と戦闘を司り、イシュクルとして稲妻と雷を司る”と宣言したから、“武芸の神”と見なすこともできる。

このように、“春日”がピラミッドを象徴しているカッパーラであることは明らかである。つまり、これも不比等の仕掛けである。そして、“春日”に関連する春日氏はピラミッドを象徴する石上神宮の神主であり、元は奈良盆地の和爾を本拠地とする和珥氏であった。“和爾＝和珥＝ワニ”であり、ワニはナイル川に住んでいるから、これもエジプトに関係がある。奈良盆地は元々、巨大な湖だったことから、“ワニ”という姓は適切である。

また、石上の読み“いそのかみ”は、奈良盆地を巨大な湖＝海と見立てた場合、ちょうど“磯”に相当する。また、次の神話から、伊勢神宮の内宮にも由来すると考えられる。すなわち、倭姫命（ヤマトヒメノミコト）が天照大神の御神託によって五十鈴の川上に祠を建て、斎宮（いわいのみや）を建てた。この斎宮を磯宮と言う。“いそのかみ”とは“いその宮の神”ということでもある。石上神宮はイエスのカッパーラを封じ込めたピラミッドの「重力拡散の部屋」だから、“いその宮の神”とはイエスのことである。

更に、春日、鹿島、香取、いずれも“か”で始まる。エジプトでは、魂のことを“バァ”と言った。死とは、バァが肉体を離れることである。それ以外に、“カァ”と呼ばれる霊体があると考えた。カァは、存命中はその人を導き、死後はバァを導くという。古代エジプトでは死ぬことを、カァの下に行く、と言った。カァは墓の中で供物を食べて暮らす、墓を出てさ迷うこともできる。供物が足りなければ、カァは外へ出て残飯や汚水を漁らなければならなくなる。そのため、エジプトでは使者に供物を捧げることが重要視された。（日本の仏教も同じ発想を取り入れた。仏教は元々、死者や祖先を無視する。すべてを断ち切るのが解脱・悟りへの道だからである。）

さて、肉体を離れたバァは、冥界神オシリスと42柱の陪審神の審判を受ける。天秤の片方に死者の心臓、もう片方にマアトの羽を置き、天秤が釣り合わなければ、控えている怪獣アメミットが即座に心臓を食べてしまい、二度と復活できなくなる。これが、古代エジプト人の死生観である。

このように、古代エジプトではカァこそが本質と考えられ、重要視されていた。だからこそ、カァに因んで“か”で始まる神宮を揃えた可能性がある。そうすると、その下の文字“すが”“しま”“とり”はどのような意味なのか。＜聖書について＞で紹介した、ヒエログリフ解読による古代エジプトと関連付けた説がある。この著者（平御幸、たいら・みゆき）は、ヤコブ（イスラエル）の息子ヨセフを重要視している。ヨセフを重要視しているのは、後に述べるように、ヨセフの息子エフライムの支族が重要な役割を果たすからである。

http://www.geocities.jp/atelier_efraym/yamataikoku1.htm

“「すが」＝「すか」であり、「すか」は光、太陽を意味する。また、「すか」＝「透ける」である。「透ける」というのは太陽光線が透過する現象である。春日は飛鳥にあり、飛鳥は春日とセットである。飛鳥は「あ・すか」、春日は「か・すが」であり、「すが」＝「すか」である。そうすると、飛鳥と春日の違いは、「あ」と「か」の違いである。そして、2文字がセットになっている漢字を当てはめると、上（あ）下（か）ということになる。これがセットになっているのは、上ナイルと下ナイルのエジプトである。つまり、飛鳥＝上すか＝上ナイル、春日＝下すか＝下ナイルであり、下ナイルはデルタ地帯で三叉と同じ構造になっており、エジプト文明の象徴であるピラミッドが存在する。”

なるほど、この説では、春日にピラミッドと「生命の樹」の象徴である三叉構造がぴったり当てはまり、辻褄が合う。そして、春日の存在する地名が飛鳥であることも。

“「しま」は、地名テーベ（ハトホル神殿）のヒエログリフ解読から、縄張りのことであり、それが地形を表すと「島」の字になる。テーベは上エジプトの代名詞であり、（重要な）ヨセフもテーベの代名詞である。”

確かに、鹿島の地形は利根川下流に位置する中洲＝島が多く存在する地域である。そして、香取よりも重要な鹿島は北＝上にある。（上エジプトはナイルの上流＝南側なので、ここでは単に“上”ということを一一致させただけである。）

鹿島近隣の銚子は江戸時代、近畿から醤油が舟で運ばれて一大産業となったほど、黒潮の流れが良好である。また、日本海を北上して青森を回り、親潮に乗って南下しても、ちょうどこの付近が黒潮と合流する地点である。物部氏が全国に散っていき、海人族などと言われていたのは、このような海流を利用した航海術を心得た、“海のシルクロード”を渡ってきた失われた十支族であるからに他ならない。

日本列島の周りを海流に乗って移動すると、ちょうど鹿島付近で北からと南からの航海が合流することになる。そうすると、それぞれに因んだ鹿島と香取という2つの神宮が、利根川を挟んで向かい合っているのも納得できる。鹿島神宮の正殿は珍しく北向きであるが、参拝者は南を向かって参拝することとなる。（中の御神体は東を向いていると言われている。）これはおそらく、黒潮に乗って南からやって来た部族が、自らの出自方向を示す印として鹿島神宮を建立したことを意味し、鹿島神宮の近くに熊野神社があるのは、その証拠と考えると良い。つまり、鹿島は南近畿・東海の物部氏由来である。

また、“とり”は“鳥”である。前述の「生命の樹」との対応から、香取＝峻巖の柱であり、聖霊＝鳥に関連する。エジプトの場合、この鳥はホルス＝隼である。よって“カァ鳥”＝“香取”である。

鹿島神宮と香取神宮の並びは東北方向であり、「生命の樹」の対応からすれば、ピラミッドと同じである！その並びのほぼ中心に春日神社があれば完璧に「生命の樹」と対応するが、残念ながら、それに相当する神社は見られない。両宮

の間は、“日の出”という地名や南よりに神栖（かみす）市＝神が住む市という地名があるが、決め手に欠ける。そこで、海側から霞ヶ浦を通して両宮の間を遠くまで眺めると、そこには“西の富士、東の筑波”と言われる筑波山が鎮座する。筑波山は男体山と女体山の双峰からなる霊峰である。鹿島も香取もエジプトに関係するから、山を御神体とすることは妥当である。筑波山には筑波山神社があり、イザナギ・イザナミ男女二神が祀られている。この二神が祀られているということは、本質的に多賀神社＝高神社であり、先ほどの“高”“倉”の奥義から、「生命の樹」の均衡の柱に相当する！筑波神社の謂れは、次の通りである。

“天照大神がこの山嶺にて紫の筑琴を弾かれた時、水波の曲に至り、鹿島の浦の波雲に乗って飛び登り、この山の嶺に着いたので、この山を着波山＝筑波山と言う。また、第10代崇神天皇の御代に、筑波山を中心として、筑波、新治、茨城の3国が建置されて、物部氏の一族・筑波命が筑波国造に命じられ、以来、筑波一族が祭政一致で筑波山神社に奉仕した。第12代景行天皇の皇子・日本武尊が東征の帰途登山されたことが古記に書かれ、その御歌によって連歌岳の名が残る。”

物部氏の関与と、熱田＝尾張氏に関係する日本武尊が登場する。また、山には蚕影山（こかげさん）神社がある。これは崇神天皇の御代にワカミムスビノカミ、ハニヤマヒメノミコト、コノハナサクヤヒメノミコトの三柱から成り、養蚕の神を祀って建立されたものであるが、“蚕”とある以上、原型は当然、大秦にある三柱鳥居の“蚕の社”であり、秦氏の影響が伺える。

他に、三代将軍家光が寄進したのが日枝神社（東殿）と春日神社（西殿）であり、何と、春日神社が存在し、見事、均衡の柱に相当している！鹿島と香取の間にあるべき春日神社は、ここに存在したのである。イザナギ・イザナミの二神で「生命の樹」の均衡の柱に相当する多賀＝高を暗示させ、均衡の柱に相当する具体的な名称として春日神社を勧請したとは、さすがである。徳川は秦氏の中の秦氏、賀茂氏の流れであるから、見事な仕掛けとしか言いようがない。これで、この地に於ける「生命の樹」は完成した。ちなみに、筑波山神社のお守りには、三つ葉葵の御紋が描かれている。

さて、先ほどの話で、鹿島が南近畿・東海由来ならば、最強の勢力を誇った尾張氏＝海部氏と同族あるいはそれに類する部族であり、“しま”が重要なヨセフに関するテーベの代名詞であるから、鹿島の方が香取よりも重要となる。また、春日大社に香取よりも鹿島が先に勧請されたことも、それを表している。そして、先ほどの「生命の樹」との対応もそれに合っていて矛盾しない。

・峻巖：香取、均衡：春日、慈悲：鹿島。

この対応を更に強力に裏付ける証拠がある。それは、香取神宮に伝わる門外不出の神器である。これは秘祭で使用される12個から成る“壺”であり、古代

文字で“ヤー（ジャー）”と記されているらしい。“ヤー”は勿論ヤハウエのことであり、ヤハウエが関わる壺ならば、それはマナの壺である！マナの壺は伊勢神宮の外宮に安置されており、外宮は峻巖の柱に相当するから、香取神宮も峻巖の柱に相当し、辻棲が合う。

そうすると、慈悲の柱の鹿島神宮は伊雑宮に相当し、伊雑宮にはいずれアロンの杖が戻されるから、武甕槌命の象徴である“剣”＝アロンの杖と一致して矛盾しない。

どうも、契約の箱アークのレプリカである神輿が多く造られたように、マナの壺のレプリカも多く造られたらしい。それは、族長の杖に由来すると思われる。族長の杖の中の杖、アロンの杖の由来は、旧約の民数記に記されている。

「彼らのうちから、父祖の家ごとに杖を1本ずつ取りなさい。すなわち、彼らの父祖の家の指導者すべてから12本の杖を取り、その杖に各々の名前を書き記し、レビの杖にはアロンの名を記しなさい。父祖の家の長は、杖を1本ずつ持つべきだからである。それを、私があなたたちと出会う臨在の幕屋の中の、掟の箱の前に置きなさい。私が選ぶ者の杖は、芽を吹くであろう。私はこうして、あなたたちに対して続いたイスラエルの人々の不平を取り除こう」…明くる日、モーゼが掟の幕屋に入って行き、見ると、レビの家のアロンの杖が芽を吹き、蕾を付け、花を咲かせ、アーモンドの実を結んでいた。…主はモーゼに言われた。「アロンの杖を掟の箱の前に戻し、反逆した者たちに対する警告の印として保管しなさい。そうすれば、私に対する不平が止み、彼らが死ぬことはない」モーゼは、主が命じられるままにした。」

十二支族の各支族の族長が杖を持っており、その中で主に選ばれた杖がアロンの杖である。（アロンの杖は、エジプトで数々の奇蹟を示した。）アロンの杖には芽が吹いて花が咲いて実を結んだから、その様子は“蔓が絡まった木”のようであり、“蔓木”＝“剣”となる。その剣は、あたかも“草を薙いだ”ような感じでもあるから、“草薙の剣”となる。だから槍などにはならない。また、アロンの杖は、反逆者に対する警告の印であるから、アロンの杖を所有していた尾張氏＝海部氏は“神武軍”と戦ったのである。

この杖に倣い、香取では十二支族に因んでマナの壺のレプリカが12個造られたのであろう。マナの壺は応神天皇由来だから、このようなレプリカが造られた背景には秦氏が存在する。元々は物部氏の影響下だったところに、秦氏の策によりイエスのカッパーラ＝「生命の樹」が植え付けられたのである。また、鹿島、香取は元々物部氏の神社だから、“神宮”の称号にも秦氏の策が伺える。元は、熱田大社、出雲大社、諏訪大社のように、物部系の重要な神社の称号は“大社（おおやしろ）”であり、鹿島大社、香取大社であったと推定される。（熱田は三種の神器の1つが祀られているということで、“神宮”扱いとなった。）なお“神社”という称号は、“神宮”と“大社”を合わせて創られた称号であると思われる。

鹿島神宮の主神は武甕槌命で武芸神であり、剣で象徴され、その剣の最たる

象徴がアロンの杖である。そして、香取神宮がマナの壺で象徴されるならば、鹿島は尾張氏、香取は海部氏ということになり、いずれも最大勢力を誇った物部氏である。だからこそ、元日の朝、天皇陛下は皇居から鹿島神宮、香取神宮を遙拝されるのである。

アロンの杖は尾張氏が所有しているから、他の所縁の神社では、レプリカあるいは象徴としての剣となる。マナの壺は海部氏が所有していたから、他の所縁の神社ではレプリカあるいは壺や勾玉となる。

物部氏の長の象徴は十種神宝（とくさのかんだから）であるが、これには剣、鏡など全部で10種類あり、中でも最たるものが剣である。剣は杖の象徴であり、物部氏は失われた十支族だから、十種神宝とは、十支族の各族長が所有していた杖の象徴であると言える。そこに鏡など、他の神宝が付け加えられたのであろう。そして、杖の中の杖、象徴的には剣の中の剣はアロンの杖＝草薙の剣であるから、アロンの杖は物部氏の中で最大勢力を誇る支族が所有することとなる。先ほどの日本武尊も熱田神宮に所縁があるから、草薙の剣に関係する。

アロンの杖は本来、アロンの系統であるレビ族のものであるが、イスラエルが南北に分裂した時には、マナの壺と共に北イスラエル王国に持って行かれた。そして、最大勢力を誇る王族がアロンの杖を所有していたのであろう。

なお、鹿島神宮－春日神社（筑波山神社、多賀神社）－香取神宮の並びはエジプトのピラミッドの並びであり、鏡像の関係になっていないのは、おそらく地形によるものであろう。先に鹿島と香取が建立され、その後に秦氏が来て飛鳥のように「合わせ鏡」の配置にしようとしても、地形的に無理である。あるいは、わざと封印を解く鍵としたのかもしれない。

また、この並びは鬼門－裏鬼門の方向でもある。“鬼”は九鬼（クカミ）のように“かみ”とも読むから、鬼門－裏鬼門とは、神門－裏神門でもあり、“神の宮”であるピラミッドの並びを象徴している。そして、最も重要な第1ピラミッドがまさに鬼門に位置する。これも、むやみやたらに“神の門”に近づいてはならない、というカバーラである。（他に、地球磁場の方向なども表している可能性はある。）

更に、近辺の地図を見ると宇都宮があり、宇都宮＝ウツの宮＝ウズの宮＝光の宮であり、イエスの宮を象徴させる。

他に、エジプトと関連していると思われるのが、オリオン像と藤原京の大極殿があった地名である。オリオン神話に於けるポセイドンは、シュメールではエンキであり、その息子が乱暴者だったのであれば、メソポタミア地方を支配しようとしていたエジプトの太陽神ラー＝マルドゥク＝オリオンとなり、先ほどの“武芸の神”とも一致する。（ギリシャ神話などは、シュメール神話、バビロニア神話、エジプト神話などが混在されたものである。）

また、藤原京の大極殿があった地名は“土壇”である。土壇場の土壇、である。旧約に“ドタン”という言葉が出てくる。ヨセフは夢解きによって兄たちや両親がヨセフのもとに仕えることなどを預言し、兄たちから嫌われた。幼い

ヨセフは、シケムで羊飼いをやっている兄たちの後を追って行き、ドタンで一行を見つけた。兄たちはヨセフの姿を認めると、ヨセフを殺そうと企んだが、助けようとするルベンの進言により、荒野の穴に投げ込むだけにした。そしてユダは、弟を殺してその血を覆っても、何の得にもならないから、やって来るイシュマエル人の隊商に売ろうと提案した。しかし、その間にミディアン人の商人たちが通りかかり、ヨセフを穴から引き上げ、銀 20 枚でイシュマエル人に売り、彼らはヨセフをエジプトに連れて行ってしまった。エジプトに連れて来られたヨセフは、得意の夢解きでファラオの夢解きを行い、ついにはエジプトの宰相となったのである。このように、ヨセフは“ドタン”で危機一髪のところを救われたから、進退極まった状態を“土壇場”と言う。

大極殿があった土壇は意味的にこの土壇ではない。大極殿は大内裏の御正殿で、即位式などを行う、天皇にとって極めて重要な場である。ヨセフは十二支族には数えず、その息子たちであるマナセとエフライムとなる。エフライムといえば、旧約のエゼキエル書にこうある。

“見よ、私はエフライムの手にあるヨセフと、その友であるイスラエルの部族の木を取り、これをユダの木に合わせて、1つの木と成す。これらは私の手で1つとなる。…見よ、私はイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し、四方から彼らを集めてその地に導き、その地で彼らを1つの民と成してイスラエルの山々におらせ、1人の王が彼ら全体の王となり、彼らは重ねて2つの国民とならず、再び2つの国に分かれない。”

これは、失われた十支族（北イスラエル王国の末裔）の代表としてヨセフの息子エフライム族が、残りの二支族（南ユダ王国の末裔）の代表としてのユダ族と1つとなることによって、イスラエル統一が成し遂げられるという預言である。つまり、この大極殿はエフライム（ヨセフ）に関する場所であり、ユダ族から天皇を輩出すれば預言が成就する、ということを暗示している。そのために、陰陽道を駆使して建設したのが藤原京である。では、その仕掛けはどのようなになっているのか。

巨人像の頭部に相当する耳成山が人工の山のようにしか見えないが、それは藤原京の構成からも解る。都は北に耳成山（玄武）、東に目無川＝米川（青龍）、西に上つ道（白虎）を配しているが、この付近は元々巨大な湖の底だったことから、南を池（湖、朱雀）と見なしても良い。巨大な湖を埋め立てたりすることによって、山、川、道を造ったのである。奈良はアラム語で“川”、ヒンズー語で“原始の海”、そして飛鳥はアラム語で“ハスカ”で“高貴な方の住居”を意味し、この地の状態をそのまま表している。つまり、完全に風水＝陰陽道を基にして造られた初めての都だったのである。そして、藤原京は普通“ふじわらきょう”と読むが、音読みすれば“とうげんきょう”である。とうげんきょう＝桃源郷とは、中国の道教に於けるユートピアである。ユートピアを実現するために、湖を埋め立て、（道教由来の）陰陽道による完全に理想的な地勢配置となるように都を建設したのである。

更に、耳成山を頂点と見ると、近くに天香具山と畝傍山がある。この3つの山を合わせて大和三山と言う。南から見て向かって右が天香具山、左が畝傍山で(2)の図参照)、盆地の平坦な地にポツンと存在し、どう見ても人工的な山にしか見えない。奈良盆地は湖だったので、そこに存在する山は人工の山と考えるのが妥当である。また、畝傍山を頂点と見ると、畝傍山-天香具山、畝傍山-耳成山の長さがほぼ等しく、二等辺三角形を形成する。そして、頂点の畝傍山から底辺(耳成山-天香具山)へ垂線を引いて延長すると、その先には三輪山が存在する。

三輪山には大物主神(オオモノヌシノカミ、別名大国主神=櫛髮玉命=大己貴神=八千矛神=大黒様)が祀られている大神(おおみわ)神社が存在するが、<日本の真相>の“丹塗り矢伝説”で見たように、この神は大物主神=火雷神であり、その息子が神武天皇であった。つまり、耳成山、天香具山、畝傍山の三角形は、神話上の初代天皇が関連する極めて重要な山を示唆しているのである。そして、次に示す系図から、大物主神=火雷神=ウガエフキアエズノミコトは、ユダヤの系図ではエフライムに相当する！

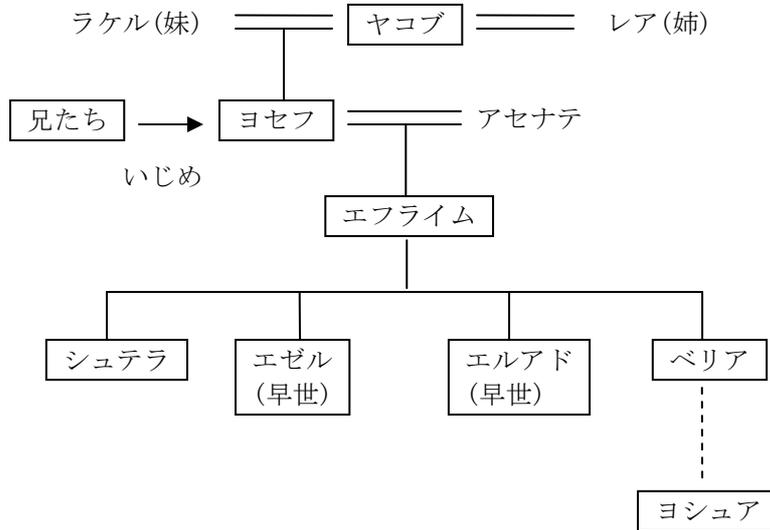
また、元々の春日大社の祭神は三笠山であり、これは3つの笠=3つの山頂を意味した。元々3つの山を拝し、更に人工的な山を利用して重要なものを示唆するとなると、耳成山、天香具山、畝傍山もやはり人工の山であり、その原型は、3つの人工の山を“神の山”と見なしていたエジプトのピラミッドである。そして、先ほどの平御幸氏の見解では、地中海の平均海面から算出した第1ピラミッドの標高と、大阪湾の現在の平均海面から算出した畝傍山の標高はいずれも199.2メートルで、完全に一致するらしい。

また、耳成山、目無川、耳成山に生い茂るクチナシの花で、“聞かざる”“見ざる”“言わざる”となる。書物や伝承は何も語らず(言わざる)、民は何も伝えられず(聞かざる)、簡単には本質が見えない(見ざる)。それが、藤原京(とうげんきょう)なのである。

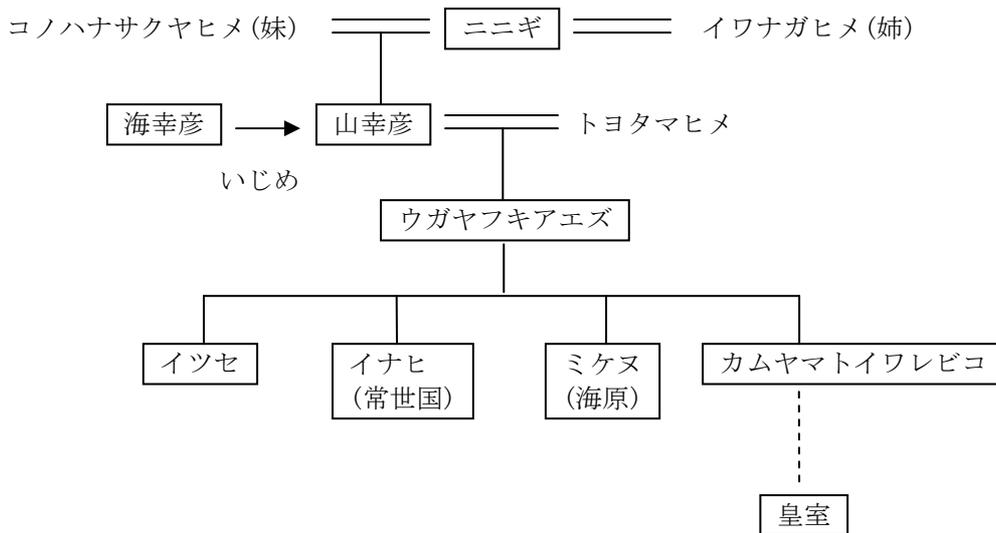
このように、藤原京は陰陽道を駆使して建設された、国内初の都である。そして、エジプトに対して「合わせ鏡」のオリオンの姿が飛鳥の地に描かれた。しかしよく見ると、やはり棍棒か剣かの区別はつきにくい。平城京に遷都してからの災難は、このはっきりしないオリオンの姿が原因で、棍棒が剣と化しているのではないかと、聖武天皇一族は感じたのであろう。そこで、聖武天皇は当時の怪僧だった行基に命じ、東大寺の大仏を建立させたのである。大仏に藤原京を向かせ、剣と化した棍棒の“呪い返し”ではなく“呪い封じ”をしたのである。これが、“飛鳥の地上絵”の真相であろう。

なお、東大寺と言えば、<日本の真相>で述べたように、大仏建立の際、八幡神の御座として使われた紫の鳳輦(ほうれん)=神輿=契約の箱アークが宇佐八幡宮から東大寺へ巡幸した、秦氏の重要な拠点である。

聖書



日本神話



陰陽道を駆使して造られた藤原京であったが、たった17年で平城京に遷都された。平御幸氏によると、この原型もエジプトにあるという。

“アメンホテップ4世（アクナテン、イクナートン）はアテンー神教への改宗を行ったが、それはヘブライ人の影響だった。しかし、エジプト国内ではアクナテンの宗教改革を支えたヘブライ人に対する反感があった。アクナテンはアマルナへ遷都したが、僅か一代で捨て去られ、アマルナの栄光は17年間で終焉となった。アマルナはアケト・アテンだから、太陽の地平線、の意味である。そして、フジワラはエジプト語では、太陽は天の唯一の道（黄道）、となるから、藤原京は「太陽の都」という別名を持っていたことになる。

また、藤原京から平城京への遷都当時、対唐政策上、国内の原始キリスト教は仏教を隠れ蓑にせざるを得なかった。何故なら、唐に於いてネストリウス派キリスト教である景教が則天武后によって弾圧され、いつ日本に飛び火するか解らない状況だったからである。（則天武後の時代、日本は持統天皇の時代とされている。そして、持統は天武天皇の皇后であり、天武の名前は、則天武後の真ん中の二文字を取って付けたのは明らかである。）藤原京を捨てたのもその一環で、別名「太陽の都」が、景教の「景」の字と同じであることに気が付いたのである。「景」＝「日＋京」＝「太陽の都」である。

そして、唐招提寺に招かれた鑑真が戒を授けるまで、日本には本当の仏教徒が1人もいなかった事実は、仏教が原始キリスト教の隠れ蓑として出発した事を裏付けている。”

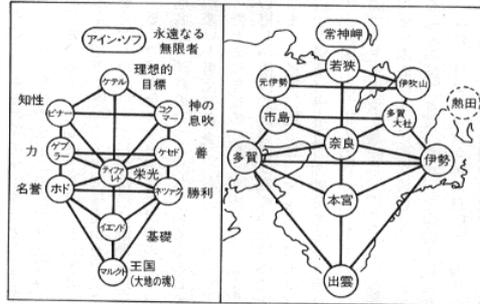
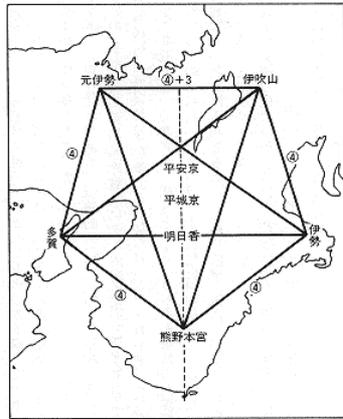
確かに、十分過ぎるほど納得できる。しかし、“その時”まで聖十字架は封印しておく必要があるのも、唐の存在があろうと無かろうと、仏教を隠れ蓑にしたことは間違いない。

なお、歴史を見ると解るように、先ほどの大極殿の話で出てきた預言は成就していない。これは、将来必ず実現する預言である。

(3) 多賀神社

伊勢神宮外宮の多賀宮が“高宮”であれば、イザナギ、イザナミを主神として祀る多賀神社は、実は“高神社”であり、重要度が高い。多賀神社と藤原京、平城京、平安京、伊勢神宮などを合わせて、飛鳥の地に見られたような地上絵を見つけた人がいる。この人も、カバラによって読み解こうとしている。（この人のものはカッパーラの本質ではないので、カバラとしておく。）その地上絵と解釈を紹介する。

<http://uumusou.yamanoha.com/monoomoi/qbl-index.html>



・解釈

まず、最も下のマルクトに対応するのは串本町の潮岬であり、大地の神霊、大国主命を祀る出雲神社がある。古来、紀伊半島の南部を“紀の国＝木の国”と言ったが、「生命の樹」に因むことは紛れもない。

イエソドは基礎を表すが、熊野本宮を中心として、個人の精神性を高めるための修験道が栄えた。修験者＝山伏は、ユダヤ教徒の装束と非常に似ていて、その前身はカバラ行者であり、「生命の樹」の業を保全し実践する者たちであったと考えられる。つまり、この地はカバラの秘儀の基礎を培った場所であったと解される。

名誉を表すホドと善を表すケセドには、数々の国生み、神生みと、黄泉帰りの功績のあるイザナギ、イザナミ神の御陵が当てられている。

ビナーとネツァクは元伊勢、伊勢として天照大神の祭祀霊場となっているが、その遷座に神話の展開上の意味が見出せる。知性の座の天照大神は天孫降臨前の居並ぶ知恵の天神たちの総帥として、次に天孫降臨に伴い栄光（ティファレト）の座の大和笠縫から、さらに勝利の座の伊勢へと神話の形式が完成されていると見られる。

ゲブラーは力の座であるが、市島一帯が強力な呪術力を持った大物主神を祀る三輪族の後裔、鴨氏の所領であることに窺える。この氏族は、三輪山をはじめ秀麗な形をした神体山を崇拝したが、春日、市島地方にはピラミッド型神体山が数多くある。

次に、コクマーは神の息吹を意味するとされるが、そこには伊吹山が鎮座している。

特筆すべきはケテルである。このセフィラは神の理念を表すとされ、実現を願う者の立場からすれば、究極の目標あるいは理想であることになろう。そこに若狭と遠敷（おにゅう）の地名の残ることに、重要な意味がある。「わかさ」はその言葉どおり、若々しさの意味であり、「おにゅう（おにふ＝生・新・降）」は生命力の更新とか新生を意味していて、共に古代人の蘇り観を反映した言葉となっている。つまり、若々しさの更新、ひいては不老長寿が理想として掲げられていると見て良い。

また、セフィラではないが、「生命の樹」の上方のアイン・ソフは、唯一者であり永遠なる無限者を表す言葉である。この位置には、常神岬もしくは御神島が湾を隔てて（つまり空間を置いて）存在している。

・これに対する批評

神霊、精神性、霊場など、従来の宗教観から脱し切れていないのは、カッパーラを理解していない証拠である。また、山伏はカバラ行者などではなく、八咫鳥の一員である。

串本を「生命の樹」の根元と見る発想はおもしろい。しかし、近くの熊野は元々、物部氏（九鬼氏、クカミ氏）の領地であり、物部氏はイエスのカッパーラの奥義を知らなかった。よって、熊野はカバラの秘儀の基礎を培った場所ではない。カッパーラの秘儀は下鴨神社で守秘されてきた。また、三輪族の後裔、鴨氏というのもおかしく、賀茂氏の本質を理解していない。

「生命の樹」に対応させた右の図では、多賀大社（彦根）と元伊勢（籠神社、天橋立）を結ぶ直線上に、隠されたセフィラ“ダアト”が存在しなければならない。ダアトは隠された知識であるから、様々な奥義が隠されている場所になる。ならば、様々な奥義が隠され、将来エルサレムとして蘇る平安京が位置することになる。しかし、実際に地図を見ると、平安京の位置は元伊勢と伊勢神宮を結ぶ直線上にある。これは、左の図の逆五芒星では正しく表現されている。他にも、伊吹山、多賀大社、市島の位置関係など、かなり無理がある。（形が相当歪む。）それに、奈良が栄光のティファレトならば、平城京こそが栄光の都ということになるが、栄光に値するものが見当たらない。よって、図のような「生命の樹」との対応は間違いであると言える。

平安京には様々な奥義が隠されているが、将来の栄光の都エルサレムだから、栄光のティファレトの方が相応しい。そうすると、元伊勢－平安京－伊勢のラインは「生命の樹」に於いても一直線となる。また、明日香の藤原京と奈良の平城京の緯度の差は小さく、これで一纏まりと見るとイエソドに対応し、平安京のための基礎にも相応しい。ただし、地図上では淡路島の多賀、明日香、伊勢がほぼ同緯度で一直線となる。

ならば、マルクトに相当するのは熊野となる。熊野は元々、物部氏の一大拠点であるが、他の藤原京、平城京、平安京、そして元伊勢、伊勢はいずれも秦氏の拠点である。そして、マルクトは“精神の地獄”で三界には含まれないから、秦氏ではなく物部氏の拠点である熊野は、マルクトに相応しい。

そうすると、至高世界は近畿地方の地上には存在しないことになる。至高世界は天照大神が降臨してこそ成る世界だから、地上に存在しなくても良いのである。

ケセドに相当する場所は、地図を見る限り伊吹山地であり、他に目ぼしい場所は無い。

よって、（藤原京＋平城京）→平安京と、「生命の樹」を上昇しているのが解る。遷都の場所には、このような意味も含まれていたのである。

なお、明日香の地理的要因には、興味深い事実がある。これも、先ほどの平御幸氏が示している。ちなみに、明日香を聖徳太子所縁の法隆寺と読み替えても良い。

- ・明日香の緯度：34.5度＝エルサレムに於ける冬至の日の南中高度。
- ・明日香の冬至の日の南中高度：32度＝エルサレムの緯度。(31.8度)
- ・明日香の冬至の日没角度：28.5度＝エルサレムの夏至の日没角度。

(4)七夕

七夕と言えば、織姫と牽牛。織姫は機織だから秦氏。牽牛は牛で、物部氏は“物”の中に牛が居る。(ヘブライの民は“金の牡牛”を祀り上げてモーゼの怒りを買った。物部氏は背教の罪を後悔していたから、“牛に勿かれ”と語る部族とした。)しかし、最初は秦氏系の天皇が物部氏の姫に婿入りしたから、この話の「合わせ鏡」が織姫と牽牛となる。(改宗した応神天皇は秦氏系と見なす。)他には、エジプトが起源である、という平御幸氏の説もある。それを、簡単に紹介する。

“ヨセフが宰相となった年も己未である。それで、ヨセフがモデルのアメン神にも羊の姿をしたものが造られた。本来は牛神のアメン神が、羊のヴァリエーションを有する理由となる。また、アセナテには星のシンボルがあった。そこで、ナイルを天に再現したとされる天の川にもアセナテとヨセフが投影された。それは、7をシンボル数に持つヨセフが丑年だったので牽牛とされ、アセナテが織女とされたのである。織の字に「オン」を意味する音の字が使われているのは、アセナテに縁のあることを意味する。オンはナイルの東にあり、テーベはナイルの西にある。これが、天の川の兩岸の牽牛と織女に対応する。ヨセフは宰相として忙しいから、滅多にオンに帰省しない。それで、愛し合っているのに会うこともままならない2人から、ナイルを天に再現した天の川のロマンスが作られたのである。七夕が7月7日に行われるのも、ヨセフがシンボル数7を持つからである。牽牛と織女もヨセフとアセナテだった。世界の文化の根幹は、実はこの2人を雛形とするものが多いのである。

ナイル西岸にあるヨセフのテーベと、同じく東岸にあるオンの位置関係を調べたところ、牽牛の天の川西岸と織女の東岸に見事に一致した。だが、一致したのはそればかりではない。ヨセフは空飛ぶアヒルのヒエログリフで象徴されるが、牽牛(彦星)は鷲座の一等星アルタイル、織女(織姫)は琴座の一等星ベガだったのである。オンには音という意味もあるから、ここから楽器が星座とされたのである。「笹の葉さらさら」の笹にも、ヨセフを指す「世」という字が使われている。「五色の短冊」は、預言者ヨセフが用いた陰陽五行における五色のシンボルカラーの数である。”

確かに、このような解釈は可能で、エジプトに起源を求めることは可能である。しかし、すべての根源はシュメールにある。この場合も、実は織姫の原型は中国では西王母である。つまりイナンナである。そうすると、相手の牽牛は

ドゥムジである。ドゥムジはニビルから羊を降ろし、牧羊・牧畜に携わっていたので、牽牛に相応しい。

イナンナはウヌグ・キの神聖な区域に、ギグヌ、“夜の愉しみの家”を設置した。それとは別に、王たちと一緒に新年の祝いの儀式も行うようになった。これらに変遷して、年に 1 回、イナンナとドゥムジが逢瀬する、という逸話になったのだろう。

*西王母 (Wikipedia 参照。)

すべての女仙たちを統率する。西王母の本来の姿は“天厲五残 (疫病と 5 種類の刑罰)”を司る鬼神であり、「山海経」には次のようにある。

“人間の女の顔に獣 (虎の類など) の体、蓬髪 (乱れた髪) に玉勝 (宝玉の頭飾) を付ける。虎の牙を持ち、よく唸る。咆哮は千里に轟いて、あらゆる生き物を怯えさせ、蛇の尾を振れば、たちまち氾濫が起きる。西王母には大黎、小黎、青鳥という 3 羽の猛禽が従っており、王母の求めに応じて獲物を捕らえ、食事として捧げる。”

最初は人間の非業の死を司る死神であったが、“死を司る存在を崇め祭れば、非業の死を免れられる”という、恐れから発生する信仰によって、徐々に“不老不死の力を与える神女”というイメージに変化していった。やがて、道教が成立すると、西王母はかつての“人頭獣身の鬼神”から“天界の美しき最高仙女”へと完全に変化し、不老不死の仙桃を管理する、艶やかにして美しい天の女主人として、絶大な信仰を集めるようになった。王母へ生贄を運ぶ役目だった青鳥も、“西王母が宴を開くときに出す使い鳥”という役に姿を変え、やがては青鳥と言えは“知らせ、手紙”という意味に用いられるほどになった。(ここまで引用。)

容貌は女の顔、獣の体、虎の牙、蛇の尾でメルカバーを形成する。ならば、カッパーラである。死を司った冥界の女神はイナンナの姉エレシュキガルであるが、カッパーラ=知恵を操れるのはイナンナである。イナンナは冥界にも下っている。

イナンナはインダス文明の主神となり、インダスの女神、とりわけ主神シヴァ神の分身の 1 つ、暗黒のカーリーでもあり、宗教に於ける暗黒の側面の原型となった。(＜神々の真相 3＞で詳細に検討する。) これが、“人頭獣身の鬼神”の意味である。また、イナンナは美の女神ヴィーナスでもあるから“天界の美しき最高仙女”でもある。

そして、“西王母”は文字通り“中国から見て西の王母”であり、それはインドやシュメールである。そこの女神であらゆる宗教の女神の原型となっているのはイナンナである。

＜神々の真相 3＞では、イナンナの性質と、もう 1 つの古代文明で仏教の原型となったインダス文明について考察する。

参考著書：

- ・ゼカリア・シッチン著、「人類を創成した宇宙人」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「神々との遭遇 上・下」、徳間書店。
- ・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- ・「伊勢神宮ひとり歩き」、ポプラ社。
- ・山上智著、「飛鳥の地上絵 呪いの巨人像」、学研ムーブックス。
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「古代秘教の本」
- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「神秘学の本」

初版：2009年4月

改定版：2012年12月